

『戦後沖縄・歴史認識アピール』

賛同者メッセージ集

及び賛同者名簿

(2016年4月21現在)

沖縄の民衆運動史から いかに学ぶか

——「戦後沖縄・歴史認識アピール」のつどい——

参考資料

(2016年4月23日)

賛同者メッセージ及び賛同者一覧 (鹿野方着分)	1 ~24 頁
賛同コメント (Change.org 書込分)	25~31 頁
賛同者名簿 (Change.org 分)	32~40 頁



2016年4月6日現在 鹿野方着

賛同者メッセージ (敬称略・順不同)

辺野古の現場から 浦島悦子 (ヘリ基地いらない二見以北十区の会共同代表)

名護市辺野古、米海兵隊キャンプ・シュワブゲート前、まだ夜も明けない早朝から、新基地建設に向けた作業を止めようと多くの人々が座り込む。あたりが白み始めるころ、人々の前に機動隊が壁となって立ちふさがり、「ごぼう抜き」が始まる。ゲートを開けて作業車(資材・重機・作業員など)を入れるためだ。

排除され、鉄柵で囲われた歩道上の「檻」に閉じ込められた人々は、目の前に立っている若い機動隊員に語りかける。東京から来た警視庁機動隊員はもちろん、沖縄県警の機動隊員も沖縄の歴史をほとんど知らない。彼らの父母や祖父母の年齢の人たちが、沖縄戦や戦後の歴史、なぜ自分たちが基地に反対するのか、ここに座るのかを話して聞かせる。それがどれだけ彼らに届いているのかはわからないが、無表情を変えない隊員が多い中、目を伏せたり、動揺が顔に現れる隊員もいる。

基地建設に向けたボーリング調査が行われている大浦湾海上でも、カヌーや抗議船に乗った市民らが、海上保安庁や海上監視会社の職員に向けて、この海の豊かさや恵みを語り、「一緒に守ろう」と呼びかける。

ここには生きた歴史教育の現場があるのだ。

毎朝繰り返されるこのような光景の中で、ある時は暴力が吹き荒れ、怪我人や逮捕者が続出し、またある時は歌や踊りが人々の心をつなぎ、笑いがはじける。怒りや悲しみ、辛いこともあるけれど、確実に歴史は動きつつある、否、私たちが動かしつつあるという実感がある。

自然と平和な暮らしを子や孫に残したいという、ごくごく当たり前でささやかな願いから始まった私たち地元住民の基地反対運動が、一時は孤立無援とも感じられた20年近い歳月を経て、いま全県、全国、全世界に共感を広げ、地球の全てのいのちと繋がり、人間としての誇りをかけた一つの流れとなりつつある。これがやがて、未来を切り開く大きな奔流とならんことを。

辺野古の現場から 宮里尚安

アピールに全面的に賛同致します。

沖縄県宮古島市城辺^{うらぶ}字砂川に生育し、県内で高校教師の職を卒えて、豊見城^{とよみぎ}で暮らししております。小説らしきものを書き、『夏の大將』(長編小説、海風社版)を出版しました。

辺野古新基地阻止を公約した翁長知事を全面的に支持し、キャンプシュワブ前の現地闘争にも参加しております。

来る7月の参院選挙では、辺野古反対から容認へと公約を覆えた島尻参院議員の当選を阻止するべく、オール沖縄の戦術に加わり、辺野古阻止の“民意”を示す覚悟でおり

ます。

八重洋一郎

琉球処分前後の資料を漁るうち、私は「日毒」という言葉に出会い胸を衝かれました。まさしく現代日本を一語にして表象する言葉だと思います。本来ならばこの言葉は歴史の彼方に昇天しているべき言葉です。しかしながら現在もなおこの言葉は地獄の底でのたうちまわっています。この言葉を地獄から救い出し昇天させるにはどうすればよいか。この度のアピールは強力なその第一歩であり心から賛同致します。

屋嘉宗彦

姉は白梅部隊で壕の中に隠れているところを火炎放射器で焼かれ、米軍の病院に収容されているのを父が見つけて連れ帰りました。全身火傷で、横になっていることしかできず、敷物と接する身体の部位は常に皮膚がはがれた状態で、それでも1年ほど生きていたそうです。

私が生まれてからもしばらく生きていて、「この子と一緒に生きたい」というようなことを言っていたと聞きました。ペルー移民帰りの父が、部隊に参加する姉を止めようと三日三晩説得しても翻意せず「お父さんは非国民」となじり、根負けした父が学校まで連れて行ったそうです。姉はそのことを後悔していたそうです。父にも後悔があったと思います。

教育の怖さ、国の力の怖さ、それを乗り越えられないことの悲しさをつねに考えます。平和憲法は、姉の遺言だと思っています。戦後すぐからその精神を具現してきたのは実は憲法が適用されなかった沖縄だけでした。徐々に憲法は掘り崩され、今や一気に押しつぶされそうになっています。高江で、辺野古で、普天間でそれと戦っている皆さんの姿と声を東京その他各地で憲法を守るために動き出している人たちにもっと伝えていこうと思います。

三木健

戦後沖縄・歴史認識アピールに賛同。

沖縄の名護市・辺野古の新基地建設現場での巨大なコンクリートブロックの海中投下、抗議する市民への海上保安庁の暴力的な取締り、もしこれらのことが本土のどこかの県で行われたとすれば、果たして国民は黙っているだろうか。現場で見えて、ふと、そう思うことがある。

本土では沖縄基地の米軍機の移転訓練に県知事がひと声反対を表明すれば、政府はあっさり引っ込める。沖縄では辺野古基地建設に20年も反対し続けているというのに。米軍基地をめぐる本土と沖縄の「二重基準」は、辺野古の問題に象徴的に現れている。日米安保をめぐる本土と沖縄への「構造的差別」が言われて久しいが、安倍政権がそれを意に介さず、「辺野古が唯一の解決策」とゴリ押ししているのはなぜか。なぜそれができるのか。それを可能にしているのはなにか。「戦後沖縄・歴史認識アピール」の次のような指摘に注目したい。

「沖縄の基地問題にあたる政府当局者に、歴史の事実や、その歴史のなかで犠牲を強いられた人の痛みを省みない発言をしてもかまわないと思わせている日本の政治・言論状況や歴史認識の現状にこそ、問題の根はあるのだと考えられる」

結局、構造的差別も、現場での権力による暴力的行動も、それを許している国民の問題として、プーメランのように跳ね返ってくるのだ。昨今の目に余る政治の劣化や、言論の右傾化状況に、このアピールが一石を投ずることを期待したい。

崎原恒新

諸手をあげて賛成です。本土の方々には、沖縄の基地等を含む諸政策について日米政府の対応を、客観的に、批判的に受け止めて下さる方々も多い反面、かなり、冷ややかな、あるいは、政府政策に寄り添う形の対応で終始するのもし少なくないという印象をもっています。特に、全国紙の新聞や、テレビ局等の対応が政府の政策によりそう形が顕著という印象を私ももっています。日本のマスコミは本来の機能を急速に失いつつある感じます。東北の原発関連報道も、東電や政府の政策の本質を隠した、方向で報じられているそんな感じをもっています。

地方を歯牙にもかけない政府や中央の報道機関の報道が、本音隠しがまかり通る。そういう中で、このような形でのアピールは大変、心強いものを感じますし、また、有り難く思っております。

辺野古基地だけでなく、沖縄の基地問題等々は私は息の長い戦いだと思っています。一気に片がついて、沖縄からあらゆる軍事基地が撤去されるとは思っておりません。しかし、軍事基地で平和が保たれるわけではないと思います。それは理屈だけでなく、沖縄戦の史的体験と戦後の在沖米軍の軍人達のふるまいです。それぞれが、自分の出来る範囲で常に、再び戦争に繋がることや、国民抑圧に対する反対を貫くことでしかないのかなとおもっております。選挙の投票行動で、集会参加で、雑談のなかで、デモの中でというように。

加納実紀代

菅官房長官の「戦後生まれ」発言に身のふるえるような怒りを感じ、満腔の共感と感謝を感じております。昨年2度サイパンを訪ね、敗戦にあたって沖縄は2度「玉砕」させられたことを痛感。戦後日本の戦後70年にあたってさらなる上塗り、日本の道義的滅亡を意味します。

石川逸子

沖縄への政府の凄まじい攻撃にたまらない気持ちでいながら、なにも出来ずにいましたので、アピールに喜んで賛同させていただきます。

明治初期に琉球王国を滅ぼし力づくで併合し、第二次大戦中には本土の捨て石にし、戦後はあっさり本土から切り離して米軍統治下の苦しみを味あわせ、今、米軍基地の74%を沖縄に押しつけ、恬としている現政権と他人事にしてきた本土の私たち。

翁長沖縄県知事がいわれた「自国民の自由、民主主義、そういったものを守れない国が、

「どうして世界の国々とその価値観を共有できるのでしょうか」との意味深い言葉を梶子に、考え、行動していかねばとおもいます。

石川旺

政治家の発言により、その能力、資質が明らかな疑問が生じる場合が最近の日本では頻発しています。にもかかわらずその政治家の立場が揺らぐことは無い。これはジャーナリズムの機能不全、無能の故だと思います。

若松丈太郎

アピールに賛同します。国政の中核にいる官房長官が、自分は戦後生まれなので「沖縄の戦後史を知らない」と公言することは、沖縄県民を自国民ではないと言っているに等しく、なすべき自らの役割を放棄し、貶めるものである。

高良留美子

戦後の沖縄の歴史は戦後の日本の歴史そのものです。四人の方のアピールに心から賛同し、菅官房長官の発言につよく抗議し、撤回を求めます。

財部鳥子

賛同する。私は満州で棄民された引揚者であるが、原爆被災、沖縄戦犠牲者にも、シベリア抑留もすべて日本国民全部が負うべき災厄と思っている。そういう決意のない政治家が為政者であり、秘密保護法を強制採決した日からすでに日本は戦時体制に入ったと思う。歴史は国民が動かすものである。私たち国民が深く考えなければならない。一番分かりやすい問題は沖縄で現在起きていること、米軍基地と辺野古の問題には、すべて現在の政治がかかわってきた。そのことに反対する。沖縄の民意を尊重すべきである。

江刺昭子

沖縄の基地問題については、何もできないのを歯がゆく思っていましたので、アピールに賛同します。

今井恭子

安倍政権の暴走は、私のような政治に無知なものにとってさえ、その恐ろしさが日ごと募るばかりです。これからの日本はどうなるのか、不安を覚えない日はありません。全て無知のなせるわざ、想像力の欠如なののでしょうか？ 信じられません。

我部聖

沖縄とともに生きる思想の歴史を学びなおす言葉に賛同します。

川満信一

この度の立ち上げに賛同します。打ち上げ花火に終わらず、沖縄問題に包括されている「世紀的」課題という観点から、全域の表現者に輪を広げる構想が望まれます。根気の要る闘いです。

仲程昌徳

心から賛同する者の一人です。翁長雄志沖縄県知事は、新基地建設をめぐる日本政府の一連の対応に対して、「ウチナーンチュ、ウセーテーナイビランドー」といい、その言葉

を「沖縄の人をないがしろにはいけない」という意味だと説明していました。沖縄の言葉にくわしい儀間進さんによりますと、「ウセーテーナイピランドー」というのは、「見くびってはいけない」「軽蔑してはいけない」という意味だといいます。翁長氏の説明が、いかに抑制されたものであるか、よく解ります。翁長氏はまた「話クワッチィー」（話だけのごちそう）とも言っています。これらの言葉は、これまで翻弄され続けてきた沖縄の人々の思いをよく表わしたものだと言っていていいでしょう。「話クワッチィー」はもうたくさんだ、「ウチナーンチュ、ウセーテーナイピランドー」というのは、また私の思いでもあります。「声明」を読んで、心のたかぶりをおさえられないままに。

羽生康二

菅官房長官の発言には、日本にあるアメリカ軍基地の70%を沖縄に押しつけていることへの反省が見られない。政府が、沖縄の人々の声に耳を傾けることなく、辺野古の基地建設を強行しようとしていることに対し、わたしも抗議したい。

羽生慎子

沖縄の歴史を研究する学者の人々が政府の官房長官、菅氏の発言に対し、沖縄の歴史認識不足だ、と抗議し、発言の撤回を求める声明を出した。わたしもその声明に賛同する。菅氏の発言は、日本各地に住む人々の認識とは違っているだろう。普天間、辺野古の問題への政府の理不尽な対応が、人々が沖縄を知ることにつながっていったらう。辺野古の人々の長年の反対運動は、辺野古の海の自然を守りたいため、その自然を子や孫世代の人たちにそのまま手渡したいためだ。辺野古の自然を守ろうとする人々は辺野古の自然をつぶしてもいいとは絶対に言わない。その人々は、血を見るような荒々しい反対運動とは違う意志表示を続けようと努力するだろう。そうするうちに、その人たちの中に老いていく人たちがいるだろう。それを思うと胸が痛い。それより早く政府が工事を強行するのではないかと心配するだけで、さらに胸が痛い。菅氏は、沖縄の歴史をあらためて知って、先の発言を撤回しなければならない。

甲田四郎

私も賛同しています。政権の沖縄に対する仕打ち、ひっくり返したいです。人それぞれの立場で、私は「いのちの籠」の編集という立場で、そう思って発言します。

金住典子

日本国民の政府なら、米軍の基地に囲まれて暮らす沖縄県の人々の過酷さを解消する努力をすべきです。

佐川亜紀

沖縄の歴史と基地の脅威を軽んじることは命と人権と生活を侵害することだと思います。

小沢節子

twitterでたまたま見かけて知りました。ネットを使うのであれば、もっと積極的にfacebookをはじめ、いろいろな方法を活用して進めたらよいかと思います。ともあれ、宣伝

してきます。

河谷史夫

アピールの趣旨に全面的に賛同します。安倍政権は沖縄に対して無知であり、無責任である。その本質が、官房長官発言に如実に現れている。

田中義直

安倍政権の歴史認識を粉砕するために、ぜひよろしく願いいたします。

新崎盛暉

ヤマトから、さまざまな立場の方々に声を上げていただくことが必要だと思います。先日、行政法の研究者が、「行政不服審査法」で知事の埋立承認取り消しを停止することの不当性を指摘する共同声明を出されましたが、これまでに例のないことで、極めて効果的だと感じました。

沖縄を含む日本の戦後史研究の専門家である皆さんの見解を明らかにしていただくことは、それにもまして重要なことだと思います。私も及ばずながら、来月『日本にとって沖縄とは何か』を問いかける小さな本を出す予定です。私にその力が残されているか疑問に感じながら始めた仕事ですが、連日辺野古で闘っている人びとに思いをはせながら、何とか最終段階にたどり着きました。

荻野富士夫

それぞれ大きな反対運動にもかかわらず、一昨年末の特定秘密保護法と今年九月の安保関連法を強行成立させたあと、安倍晋三首相は「説明不足だった。今後、丁寧に国民に説明をし、理解を図っていく」と述べたものの、その丁寧な説明はどこでなされたのでしょうか、私たちは一度も聞いたことがありません。この弁明は、その場しのぎの反省ポーズに他なりませんでした。

「普通に戦争ができる国家」をめざすこの二つの戦争関連法は、多くの人々に戦争の時代が再びやってくるという不安と警戒を呼び起こし、国会の周辺への反対運動への参加と同調を自発的にうながしました。これに対して、安倍首相は「一九三〇年―四〇年代の世界と現代の世界、日米同盟と日独伊三国同盟を同列に扱うのは間違っている」（二〇一四年七月の衆議院予算委員会での集中審議）と、何の説明も加えることなく断言しました。その独断的な歴史認識は、菅官房長官の沖縄と日本の戦後についての歴史認識の誤謬と通底しています。

アピールにある「歴史の事実や、その歴史のなかで犠牲を強いられたひとの痛みを省みない発言をしてもかまわないと思わせている日本の政治・言論状況や歴史認識の現状にこそ、問題の根はある」という一節は、北海道の北星学園と植村隆さんをめぐる問題でも、あらためて痛感するところです。

安保関連法の終盤の国会審議で浮上した「南シナ海」・「東シナ海」をめぐる「シーレーン」危機の強調は、中国の軍事的脅威の高唱と結びつき、沖縄を基軸とする日米安保体制のさらなる強化、および自前の「自衛力」の拡充をうながす方向に進ませようとして

います。

そのような現在のせめぎ合いの状況に位置している私たちにとって、「戦後沖縄・歴史認識アピール」はもっとも時宜を得た、重要な問題提起だと思います。

井出孫六

ここ数年の間、安倍首相の改憲論が私には最も気になる事柄でありましたが、今回の沖縄問題に関する菅官房長官の暴言も、同じ歴史修正主義から発せられているように思われてなりません。歴史は政治家の生命である筈ですが、悲しいことに、現政権の人々の眼には修正主義という病いにおかされているとしか、私の目には映らざるを得ないようになってしまいました。皆さまの研ぎ澄まされた歴史認識によって今日の危険な状況を乗り越えてほしいと切に希望しております。

細谷正夫

沖縄の歴史について、少しは知っているつもりでございましたが、今回の声明に接し、これまでの知識の浅さに愕然とし、その不明を深く反省しております。沖縄県と日本全体の自由と民主主義を守り、全国民の基本的人権を守るため、この声明を支持し、先生方の活動を応援して参ります。

細谷満

今まで、「辺野古基金」を応援して参りましたが、今回の声明は、沖縄の人々の大きな力になるものと信じます。ぜひ、この声明を沢山の人たちに広めていきましょう。

山本千恵

学びつつある者のひとりとして、心に深くとどめ、生かしてゆきたいと存じます。まことに許しがたいこの国の有様のなかで。

櫻本富雄

アベ内閣の歴史認識のイイカゲンさは話になりません。そんな政府をえらんだ私たちは、今こそ、政府を打ちこわさなければいけないと思います。どのような協力もおしひませんから、がんばって下さい。

花崎皋平

よろこんで賛同させていただきます。老来、政治の右傾化に歯止めがかけられず、良識ある諫言よりもあきれ、怒る方へ心が向かいがちですが、こうした声明に接すると、冷静さが必要なことを教えられます。

仲宗根将二

「戦後沖縄・歴史認識アピール」に、心から全面賛同します。

「オール沖縄」県民の意志はきわめて明快です。2014年のすべての関係する選挙で、「普天間の米軍基地を閉鎖・撤去し、辺野古に最新鋭基地を造らさない」と公約した候補者がすべて圧勝しているからです。

1945年3月～6月、3か月に及んだ「沖縄戦」では、県民4人に1人が亡くなっています。宮古圏域から沖縄本島の地上戦に召集、動員され、また師範学校や中等学校（男・

女) に在学中の生徒も動員され、その多くが命を失っています。送り出した宮古圏域は地上戦こそなかったものの、米・英軍の連日の無差別猛爆撃で、中心市街地をはじめ、大方の集落は焦土と化しています。

先の大戦では他府県も米軍の連日の猛爆撃にさらされていますが、逃げ場のない小さな島の中での地上戦による惨状を同列にみるのは如何がなものでしょうか。

「友軍」とよばれた同胞の軍隊から、先祖伝来の日常語たる方言使用をスパイ扱いされ、あるいは防空壕から追い出されて戦火の中に放り出され、命を失ったのが沖縄県民です。沖縄を占領した米軍は、日本本土侵攻のため軍事基地を強化・拡大しています。さらに戦後も収容所に県民を隔離したまま、軍事基地の一層の拡大・強化をはかっています。1950年代には「銃剣とブルドーザー」で県民を追い出し、住居も耕作地まで強奪して、現在のアジア最大の軍事基地へ拡大・強化しています。

翁長県知事が機会あるごとに主張しているように、沖縄県(民)が自ら米軍に軍事基地を提供したことは一度もないのです。

1960年代に入って、沖縄県民の「日本国憲法」の下への「祖国復帰」運動は、壮大な運動へと発展していきました。しかし1972年5月、長年の悲願である「祖国復帰(沖縄返還)」が実現したとき、沖縄県民は「自衛隊反対、軍用地契約拒否、安保廃棄、『沖縄処分』抗議、佐藤内閣打倒5・15県民総決起大会」を開催して抗議しました。それは「施政権」のみの返還であり、諸悪の根源たる米軍基地はそのまま居すわりつづけることにしたからです。

2014年、名護市民は市長選挙、同市議選挙、沖縄県民は県知事選挙、総選挙(全4小選挙区)で、「普天間の米軍基地閉鎖・撤去、辺野古に最新鋭米軍基地を造らさない」と公約したすべての候補者を圧勝させました。

米軍基地をこれ以上造らさないという「オール沖縄」の民意は疑問の余地なく明快です。国の最高責任者たるもの、この国が民主主義の国ならば直ちに、翁長県知事はじめ「オール沖縄」の民意を尊重して、普天間の米軍基地を即時閉鎖・撤去し、辺野古の最新鋭米軍基地の建設工事を中断すべきです。

歴史研究者の「アピール」に全面賛同する思いのままに……。

芝憲子

アピールに賛同いたします。

沖縄も他都道府県もいっしょになって、辺野古の工事を一時間でも早く止めるよう、ねがっています。

市原千佳子

私はこの度の、歴史研究者四氏の「戦後沖縄・歴史認識アピール」に心から賛同します。声明文のなかの「歴史認識は社会のもので」という一行は、相当に貴重な点を示しています。つまり、戦後七〇年経てさえ、正しく歴史認識されていないという沖縄の現実をです。日本国を牽引する内閣府の者でさえ、「私は戦後生まれなので沖縄の歴史はなか

なか分らない」という正直な浅はかぶりを露呈しています。個人的に引き寄せてその場しのぎをする。政治家のしてはならないことです。一億の民も推して量るべしか。このような認識状況に、沖縄の民の一人として、私は悲しみ絶望し、怒りを覚えます。日本本土と沖縄は海で隔てられています。この距離が人間の肌の温度感を遠くさせていることは承知しています。そう、対岸の火事なのです。沖縄での出来事は、しかし、それでいいはずがありません。戦後沖縄の歴史は、日本国のそれでもあるからです。戦後、要求もされていないのに積極的にアメリカに沖縄をいけにえとして差し出し、日本国の主権と物々交換したのが、昭和天皇だというではありませんか。その後の政治家たちも大同小異です。日米安全保障条約以後、十年毎に見直されるはずの条約も、その六条の屈辱的な地位協定も検討されないまま、今日まで来ました。日本国がアメリカ側にアクションを起こさなかったからです。沖縄は軍事的に貸与しつづけるに価値の高い存在でしかありません。日本政府は、沖縄に対しては、狡猾であり無恥厚顔であり、人間の温かい心情を失くしています。

辺野古新基地建設にあたっては、次の四点において問題を感じます。

(1) 普天間の基地は、<世界一危険>ゆえの撤去でした。それがいつしか、辺野古の移転という交換条件になっていきました。撤去は撤去。無条件に撤去すべし。

(2) 日本政府は、沖縄基地負担の軽減を唱えつつも、現実的には逆であり、結果、沖縄に嘘をついている。辺野古新基地建設は、さらなる負担の増強であることは明らか。

(3) 日本政府は、他府県の民意は聞き入れるのに、何故に沖縄だけの民意は無視されるのか。根元に、差別しながらも利用できるところは利用するという根幹のコンセプトがあるのか。

(4) 沖縄問題は、日本国の首根っこに在ると考えられる。アメリカには気をつけないと、日本国は、民主主義と独立国としての尊厳を奪われてしまう。

どうか、この度のアピールで、小さな沖縄の大きな課題が世界の心ある方々に届きますように。

柴田三吉

歴史を沖縄からすべての軍事基地を撤去し、アジアの平和の拠点とすることが、私たちの未来をつくることになります。歴史をかえりみず、切り捨てていく政治を止めなければなりません。人間の生身の痛みを知らない政治家、想像力の欠如した政治家から、本当の政治を取り戻さなければなりません。

桐野輝久

国民一人ひとりが声を上げて、強者が弱者を圧殺する社会を変革していかない限りは、虐げることに痛みを持たない特権階級の人々や、大多数の鈍感さに慣れきっている人々を覚醒させることはできないと考えます。

岡田真紀

どこまで日本は沖縄に甘え、沖縄を踏みにじり、犠牲にしたら気がすむのか。日本とい

う国の傲慢さが琉球処分以来連続と続いていることに、恥ずかしさと怒りを覚えずには
いられません。今、オール沖縄を成し遂げ、保革を超えて日本とアメリカ政府に対峙し
ている沖縄に、ヤマトのいわゆるリベラルといわれている人たちもまた学ばなくては
いけないと思っています。

中村不二夫

喜んで賛同させていただきます。一総理の独善的な感性で、平和日本の土台が揺らいで
いることに危惧を覚えています。戦後沖縄の悲惨な歴史を学び、世界平和への道筋を考
える機会にしたいと思います。

瀧沢敬三・瀧沢正枝

歴史の事実を曲げて、自分たちの勝手な解釈をした、このたびの菅官房長官の発言は、
一国の内閣を統率する立場からして、絶対に認められません。

沖縄の人々の、今もって持ち続ける“熱い志”に、少しでも近づけられるよう、さらな
る勉強に努めたいと願っています。

坂田一則

去年、福岡であった沖縄を考える講座に参加した時のことです。普天間問題の話のあ
とで、一番前の席にいた年配の男性が質問しました。「普天間飛行場が住宅密集地にある
のは、戦後、仕事を求める人たちが基地のまわりに集まってきたからだと聞いている。
講師の認識は違うのではないか」。

質問した男性は、沖縄に心を寄せ、沖縄のいまを知りたいと講座に参加したのだと思
います。「普天間はもともとは田んぼのなか」という、自民党の若手国会議員の勉強会での
作家の発言が報じられたのは、それから2週間ほどたってからでした。

政治的な意図をもって歴史を書き換えようとする「運動」は、社会の意識に働きかけ、
浸透し、思っている以上に“成果”をあげていると思います。

「沖縄プロジェクト」という言葉を思い出します。戦後60年の2005年、渡嘉敷島など
で起きた集団自決をめぐって大江健三郎氏と岩波書店が提訴されました。その2か月前、
「運動」に身を置く人が言いました。「教科書から従軍慰安婦の記述を消すプロジェクト
は一定の成果をあげた。次は沖縄だ」。沖縄の集団自決は軍命によるものと書かれたもの
を見つけたら、全国にいる会員から抗議のファクスを集中させるのだとその人は話して
いました。

歪められた歴史意識が浸透していったのは、こうした組織的で地道な「運動」がもたら
した“成果”だと思います。その“熱意”に対して、わたしたちはあまりに油断してい
たのではないのでしょうか。追い詰められている情勢への認識を新たにしました。

声明に賛同します。自分に何ができるかを考え、「沖縄からの問いかけ」に応える努力を
わたしも始めたいと思っています。

埋田昇二

全面的に賛同します。政府権力が本土国民の心理的距離感や無関心をも利用して「沖縄

県民の声」を常に枠外においてきたことに対して、私たち自身の力不足を痛感せざるをえません。安保法制をめぐる論議でも沖縄と日本の戦後史にたいする菅官房長官の無理解な発言に対して強く抗議するものです。

西村汎子

大賛成です。一九七八年のイザイホーの祭の見学に、初めて沖縄へ行った時、沖縄の各地が基地に蔽われているのを見て、驚きました。本土の私たちは、辺野古の新基地を差し止めるという重大な戦の最中にあっても、まだ沖縄の問題を自分たち自身の問題として受け止めていない状況にあると思います。戦後から現在に至る沖縄の歴史過程を正しく認識し、沖縄をアメリカの軍事占領下から最終的にかいほうするために、全国民があげて声を上げるよう努力すべきだと考えます。

10人余りの研究者及び市民にアピールを送り賛同をお願いしました。

義江明子

“沖縄で平和と人権・自治を打ち立てることがすなわちアジア・太平洋に真の戦後、平和をもたらすことになるという思想”に深く共感します。

永島昇（作成して下さった署名簿の趣旨説明として）

4氏は「戦後沖縄・歴史認識アピール」を昨年12月15日に、1228人の賛同者数とともに、安倍内閣の菅官房長官に提出し、菅官房長官の「沖縄の歴史への認識不足で無責任」な発言を撤回することを求めました。

「戦後沖縄・歴史認識アピール」には国内だけでなく、韓国、アメリカ、カナダ、オーストラリアをはじめ世界各国から賛同署名が集まっています。

私たちは、「戦後沖縄・歴史認識アピール」に賛同し、「沖縄からの問いは、戦後七十年の歴史的な問いであり、まずもってそれに答えるべきは、政治家や専門家もそのうちに含む日本本土社会の人間」の一員として、「沖縄の住民世論に即したかたちで基地問題の解決をはかる」ために運動に参加していきたいと思います。

渡邊澄子

安倍政権の歴史認識の無知・無恥さに激しい憤りを覚える。沖縄のあまりにも悲惨な歴史に真向ったことがあるのだろうか。憲法違反の原発・武器輸出など「死の商人」のトップをつとめ、防衛費の増額、駐留軍（家族）への思いやり予算の増額には言葉もない。原発・原発犠牲者他、思いやらねばならぬ国民への視点はないにひとしい。安倍政権に断固反対する。

平野英雄

沖縄の小さな島、浜比嘉島に生まれた彫刻家金城実さんは敗戦の時、五歳であった。アメリカ軍の軍事占領下の幼い頃ステーキの肉やオレンジは海から採れる、と思っていた。実はそれはアメリカ軍の艦艇が捨てた残飯に混じっていたものを、島の漁民が沢山捕獲してきたものだった。「基地の島」で生きてきた金城さんはかつて「在日」沖縄人・「在沖」沖縄人の論争を興そうとした。日本復帰後、ウチナーンチュは安易に日本人になる

なという、平和憲法の「配当」がどこにあるのか、と主張した。

いま「集団的自衛権」行使の戦争法=いわゆる安全保障法で、わたしたちはアメリカ軍による「いわゆる庇護」から、アメリカ軍への「援護」へとなる、戦争をして平和を守ろうという「積極的平和主義」の国になってきたのだ。それは恐らくこれから援護から「軍事的」自立への「徴兵制への道」を歩もうとしているのだ。

本土のわたしたちは沖縄から何を学ばねばならなかったのか？ 平和憲法の「配当」どころか、平和憲法の「廃棄」をまさに迫られているのだ。

無季俳句「戦争が廊下の奥に立っていた」（渡辺白泉）の如く戦争が見えてくる。「戦前」になっては絶対いけない。

坂口和子

政府高官の発言、「戦後生れなので沖縄の歴史はなかなか分からない」という逃げ口上にあいた口がふさがりませんでした。何たる無知と無情、知ろうとしない怠慢さ、こういう人間に日本の舵取りをまかせているのかと思うと腹が立ちます。私は沖縄をはじめ先島諸島が大好きです。御嶽を訪ねまわって日本の豊かな基層文化の根元を知りました。率直で敬虔な島の人々が進んで土地を軍事基地に提供するでしょうか。権力者の強奪としか考えられません。私たち本土に住む人間がもっと沖縄を知ろうとしなければなりません。観光で訪れる沢山の人たちは“良いとこ取り”ばかりで沖縄の真実を知りません。公平な眼で本土と沖縄の間にある誤解や偏見に気付く“歴史認識アピール”はないものでしょうか。

澤地久枝

心から賛同します。

記憶のある限り、こんなにひどい政治はあったことはありません。戦争が終って七十年余、沖縄の自由をかちとり、米軍基地を容認した日米安保条約を変え、日本の政治の根本を変えたいと思います。

最初の第一歩が肝腎。

鎌田慧

賛同致します。

わたしたちの無知と無関心が、歴代日本政府の差別と圧制をつくって来ました。その責任を感じながら、わたしも沖縄の人たちの期待に応えられることをしたい、と思っています。

中村みどり

沖縄から基地が消える日は、どのようにすれば到来するのか。私たちにとって現実的な課題とは、「どこで踏みとどまれるか」というところにあると思います。弱者にしわ寄せをして問題をごまかし続けることをどこでやめられるのか。私たちにできることはどういうことなのか。一步一步確かめながら歩むことしかできないように思います。小さな力が集まるのが大切だと思いますので、喜んで賛同させていただきます。

長崎誠人

謙虚に歴史に向きあおうとする姿勢に深く共感しており、それへの信頼をもとに賛同する次第です。

千本健一郎

時を得た行動の一步と受けとめました。これはまことに息の長い、日本の対沖縄歴史差別をはらんだ問題です。それだけにこのアピールに盛りこまれた趣旨に共感する気持は、いささかも変わりません。今後もこうした運動のお役に立てば、その一端になりと加えていただければ幸いです。

丸浜江里子

「戦後沖縄・歴史認識アピール」に心から賛同します。自民党議員の恥ずべき発言が頻発しています。そのいずれもが歴史認識を欠き、無知を恥ともしない無責任さを露呈しています。沖縄は沖縄戦だけでなく、戦後において20余年も米国の軍事占領下におかれ、「返還」後も、多くの人権侵害（基地被害）がくり返されています。それは、他でもない自民党政権下で行われてきたことです。「戦後生まれ」などの言葉で言い逃れできることではありません。こんな基本的認識を欠いた人物が政権中枢にいることは、国の方向を誤らせることに他なりません。上記アピールに心より賛同するとともに、アピールを多くの人と共有し、訴えていきたいと思えます。

宮川耕次・宮川耀子

全面的に賛同し、宮古の人びとにも少しずつ広げていければと、と思えます。

宮古島、石垣島、与那国島の先島と沖縄、奄美を結ぶ自衛隊配備計画は、辺野古とともに新しい琉球弧の軍事的動きである。島でのやり方は機密主義と地方自治の無視で、「防衛は国の専権事項」などと豪語し、島全体が地下水に依るなか流域に掛かった軍事施設の配備を強行しようとしている。情報は小出しで、非公開が多い。他の島々でも同様なようである。エアーシーバトルという日米の「限定戦争」戦略だそうである。さきの大戦に次いで、再び軍事的な「捨て石」と目されている。

戦時中の、島での悲しい事実を二つ挙げる。県内の各地同様、この島でも16か所ほどの日本軍慰安所があったという。韓国、北朝鮮の女性たちが連れてこられた。日本の植民地支配の一環である。2008年、日韓共同調査団によって、島に碑が建てられた。

もう一つは、島にあるハンセン病の国立療養所での出来事である。戦況が激しくなると、入居者を見ていた職員らが逃亡し、入所者は見捨てられた。周辺で壕を掘って避難したが、日本兵がやってきて壕を追っ払われた。海岸線の自然壕や雑木林などに逃れたが、栄養失調やマラリア病に罹り、多くの死者が出た。

今後、こうした事実を一つひとつ明らかにしていく使命感を、島人（すまびとう）の一人として抱いている。

長濱幸男

「戦後沖縄・歴史認識アピール」に喜んで賛同します。コバルトブルーの海に囲まれた

南国宮古島は、全日本トライアスロン大会などスポーツ・イベント大会を実施して、国内外の交流促進と観光の振興に全島上げて取り組んでいます。島の振興のために、国は近隣諸国に対して憲法9条による平和外交を進めることが求められます。ところが、安倍政権は憲法違反の戦争法を強行採決し、その具体化のために、辺野古の新基地建設強行とともに宮古島に自衛隊のミサイル基地建設を住民無視で進めようとしています。宮古島へのミサイル基地建設は、諸外国からの観光客誘致にも逆行するもので、絶対許せません。辺野古新基地ストップ、宮古島への自衛隊ミサイル基地配備計画撤回、憲法9条を守るために、本土と沖縄の連帯強化はますます重要だと思います。「アピール」は、連帯の輪を広げるために大きな効果を上げるものと確信しています。共に頑張りましょう。

早乙女勝元

もちろん賛成です。娘と孫たちが那覇にいますので、かれらの未来の平和のために、もうひとふんばりと心しております。老いぼれてなんかいられません。

飯尾眞

沖縄問題とは、沖縄を差別し続けてきたにもかかわらず、そのことに無自覚な本土側の人間の問題である。沖縄の人々が「屈辱の日」とよぶ4月28日（沖縄を切り捨てた対日平和条約発効の日）を「主権回復の日」として祝って恥じない知的に怠惰な現政権の存在がその端的なあらわれである。

平城智恵子

『イナグヤ ナナバチ』を読み沖縄を訪れたとき、喜如嘉のおばあさんは見ず知らずの私を自宅に招き入れ、自身の歴史を朗らかに語ってくれた。なんという心の広さ。歴史を知らない、知ろうとしない者たちにもうこれ以上、あの人たちを踏みにじらせるわけにはいかない。声明に心より賛同いたします。

江原良子

歴史を謙虚に学ぼうとしない者が、この国の権力の中枢にいる。なぜ彼等にその地位を与えてしまったのか。歴史を学ばないことの恐ろしさを今ほど感じる時はありません。戦後の歴史教育は何だったのか。それに携わった者として、重い問いを抱え込んでいます。

矢野操

心から賛同します。父は、私が五歳、上の妹が三歳、末の妹が生後六ヵ月のとき出征し、中支（中国中部戦線）で戦死しました。出征の日の朝、父は私を玄関の外に誘い、「母さんと妹たちを、頼む」といいました。たぶん私は、「うん」と頷いたでしょう。現在の歳になると、私たち姉妹を育てるために、母がどれほど苦勞したかが、痛切に理解できます。戦争・基地、いっさい反対です。

水野るり子

力強いアピールに心から賛同いたします。このところの急速で、あらわな政治の右傾化を、周辺の人々とともに日々驚き嘆くばかりでしたので、このような協力の場を与えて

くださったことを大変有難く思います。沖縄の海を愛していた甥夫婦は老母を連れて、昨年、本土から沖縄に移住してしまいました。彼らを取り巻く沖縄の豊かな自然のためにも、この運動を応援したいです。

水野敬三郎

全面的に賛成です。沖縄と日本の歴史に無知のまま、あるいは無知を装って、さまざまな施策を進める政権に呆れ、怖しさも感じます。まっとうな研究成果に基づく歴史認識による、このような意見表明こそ、今もっとも必要です。

矢ヶ崎克馬

アピールに賛同いたします。

明治維新で「沖縄処分」などという言葉が使われていますが、それまで諸外国に「独立国」として承認されていた「琉球王国」が、武力によりだまし討ち的な手段も用いられ、日本に併合された歴史はきちんと見ておかねばならないと思います。日本に併合されてからの沖縄は日本政府の植民地的な扱いを受け続けてきました。侵略戦争戦前、沖縄戦、戦後通じて。

アメリカの支配下に置かれた日本政府の沖縄処遇に関する姿勢は「同胞をどう処遇するか」という身内意識に欠け、独立国としての主権に欠ける「覇権主義に基づく対米従属国の植民地的沖縄に対する身勝手」そのものでした。サンフランシスコ条約の主権放棄の屈辱を経て、沖縄住民は良く苦難に耐え、米軍権力抑圧に非暴力の団結で立ち向かい、米軍の占領に終止符を打ちました。1960年の安保継続阻止大闘争の後アメリカは日本支配の方法の根本的変換をいたしました。いわゆるケネディーライシャワー路線です。その成果により、日本本土では1980年以降、すべての都道府県で政党間での一切の民主的団結が成し得なかった期間も、沖縄では激烈なアメリカの軍事的直接支配のもとに米軍支配に対する革新的団結を維持し続けてきました。それが今のオール沖縄に結びついています。

その沖縄の住民たちがいま示しているのは明確な主権者意識です。日本の住民としての住民主権を唱えています。

憲法違反が明白である集団的自衛権を行使できる安保法が施行されました。日本住民が如何にしてこれを廃止していくことができるか、「沖縄方式」を採用し、大局的視点で団結を示すことができることが、日本に真の主権者が居り、日本を真の主権国にする一歩になると思います。人格権・人権・憲法に基づく住民の支え合いがある主権国にしたい。一人ひとりが大切にされる社会を作り上げたい。

頑張りましょう。

絹川早苗

沖縄を犠牲にすることで戦後を迎えて繁栄し、また基地問題でも沖縄に一方的に押し付ける形で戦争参加への道を選ぼうとしている日本政府の菅官房長官などの、沖縄の歴史への認識不足で無責任な発言を撤回することを強く求めます。

不破修

「戦後沖縄・歴史認識アピール」に声を重ねたい。

「ヒバリの鳴き声も、耳かたむけなければ聞こえない。沖縄の声も…」。手つかずのまま草に埋もれていた軍転跡地で、仲村渠力雄さんの話を聞いたのは、沖縄を初めて訪れた1978年春のことである。沖縄を訪れるたびに、沖縄の戦中・戦後の歴史を理解することの難しさを感じている。

1995年、少女暴行事件に抗議する県民大会で、普天間高校の仲村清子さんは「軍隊のない、悲劇のない、平和な島を返してください」と求めた。この訴えは心を揺さぶるものであった。2007年「高校教科書検定に抗議する県民大会で高校生たちは、「私たちのおじい、おばあちがうそをついていると言いたいのでしょうか」と語り起こした。発言を支える読谷高校の津嘉山拡大さんの見事な歴史認識は、歴史を自らのものにするこの意味を考えさせるものであった。そして、昨年6月23日、沖縄全戦没者慰霊式での与勝高校の知念捷さんの「みるく世がやゆら」は、沖縄の文化と歴史を全身で受け止め、歌い上げたものだった。沖縄にこのような若者が育っているのだと感動を覚えた。この3人に代表される戦後生まれの沖縄の若者たちは、歴史に問いかけ、自ら歴史に踏み入ることによって、確かな歴史認識を獲得している。「私は戦後生まれなので沖縄の歴史はなかなか分からない」と発言した菅官房長官は、彼らに語る言葉を持ち得ない。況んや沖縄の戦中戦後を生き抜いてきた人びとにたいして、何事か求め、語る人間的根拠をもたないと断じることが許されるであろう。菅官房長官は、沖縄戦を生き抜いてきたおじい、おばあの声、長くつづく「占領状態」の下で刻苦した人びとの声、そして若者たちの声に耳かたむけるいかにほどの努力をしたのであろうか。

新崎盛暉は、「戦後沖縄の政治、とりわけその根幹をなす対米従属的日米関係を支えてきたのは、構造的沖縄差別であった。その仕組みは、戦勝者＝占領者であるアメリカによって作り出され、日本の独立後も引き継がれた」と論じている(2015年)。私もこれに同意したい。その上に立っていえば、菅官房長官が沖縄の歴史を理解していないことは、戦後日本の歴史を理解していないことを意味する。沖縄基地負担軽減担当として任に堪えないことは明らかであるばかりでなく、日本政府の中樞を担う基本的資質に欠けることを意味する。

2015年9月10日の菅官房長官の発言にみられる歴史認識、そして沖縄と日本の戦後史、あるいは現在にいたる日米両国の対沖縄政策の理解はとうてい許容できない。私は、鹿野政直、戸邊秀明、富山一郎、森宣雄4氏に賛同し、ともに抗議し、発言の撤回を求める。

4氏は、「沖縄と日本の戦後史の研究に携わる者として」アピールを発している。私は、中学生の学びに向き合ってきた元授業者として、また巨大な米軍横田基地近くのおきる野に住む者として、このアピールを受け止めたい。

中学校社会の学習を方向付けている学習指導要領では、「我が国の歴史の大きな流れ」を理解することを歴史学習の目標としている。「我が国」に琉球・沖縄は入っているかと問いたい。

2001年までに施行された学習指導要領（「試案」を含めて）に、「琉球・沖縄」の文字を見ることはできない。1972年の沖縄「復帰」によって、学習指導要領は1語として見直されることはなかった。2002年施行版の「内容」に「琉球の国際的な役割」（中世の日本）が記載されたが、現行の2008年告知版（現行版）では、「内容」から削られている。

「内容の取り扱い」で「琉球の国際的な役割」「沖縄返還」があげられているだけである。もっともこの学習指導要領は、「内容」としては「原爆」の語さえなく、「大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解させる」と記すのみであるが。

毎日の歴史の授業は、その教室にふさわしいと考え整えた教材によって創出される。そのときに、検定済教科書も活用される。琉球・沖縄の歴史についても、多くの授業者と教科書編集執筆者の研究と創意・努力によって学習指導要領を越える豊かな教材が準備され、中学生たちの学びがうみだされている。私が関わった検定済教科書（学び舎『ともに学ぶ人間の歴史』）は、琉球・沖縄の叙述が充実しているとの評価を受けた。しかし、これも現状では、「ヤマト」を中心とした「本土の歴史」に幾許かの琉球・沖縄の記事を嵌め込んだものに止まっている。これは他人事ではない困難な課題である。

我が家の上空では今日も米軍用機が飛びまわっている。米軍横田基地の機能、役割が新たな段階に入っていることを実感させる。2017年に配備予定と通告されたCV22 オスプレイは、沖縄も訓練場とするであろう。「軍一軍の調整機関」が横谷常設される。ここでも「沖縄の闘いを支援する」という発想から脱することが求められている。

「自分に合わせた運動を」とかくにんしつつ、4氏の声、それに喚起された多くの人びとの声に、私の声も重ねたい。

堀場清子

時々刻々、辺野古で刻まれている歴史は、わたくしたちの社会の歴史の最尖端です。傍観してはいられません。

賛同者

藤目ゆき	富山妙子	若松蓉子	具志堅勝也	原田奈翁雄	一森綾子
一森博	一森直子	福田篤	福田知子	北島和子	高尾眞知子
坂本耕一	岩淵宏子	竹内栄美子	岡野幸江	朴和美	平城正憲
平城清志	平城光雄	平城直樹	角田三佳	齋藤ゆかり	青井未帆

内海孝	麻生直子	関千枝子	森田裕美	馬場洋太	滝澤民夫
坂口大和	坂口立考	仲寿子	遠藤康子	田辺哲生	田辺亜由子
櫻沢一昭	櫻沢雅子	氏川一美	北河賢三	赤澤史朗	黒川みどり
貫井薫	須田いく子	岩井健作	佐々木雅子	沖田忠子	濱野一郎
長井英子	田淵淑子	渡辺文子	清水順子	田辺伸	佐藤八重子
大上恭一	貞兼綾子	加藤協子	明石太郎	渡辺葉子	渾大防一枝
平野絢子	新谷のり子	杉本策子	平野マリ子	久保田宏	満田康子
高橋勇	矢野三千夫	矢野博之	宮本英子	橋本宏子	湯浅真紀
青井未帆	佐藤学	山口美代子	折井美耶子	枝松栄	鹿島光代
生方孝子	ひろたまさき	鷺見雅子	鷺見研作	鷺見泰子	村上良子
長谷川英子	新城栄徳	平田賢一	長妻治男	宮崎黎子	岩下郁子
炭谷昭子	深津俊郎	大山美佐子	山本洋	広瀬玲子	荒牧重人
大山早苗	長島光二	長島淳子	長島遥	本間重子	宮岡清子
高田千夏	山辺恵巳子	金子敦郎	水藤真樹太	竹田保孝	高井有一
中村輝子	鎌田雅子	大谷直紀	海保洋子	上田理恵	鈴木裕子
成澤榮壽	渡邊勲	須崎慎一	岡村幸宣	山中妙子	石黒加那
柿沼マサ子	柿沼直樹	市川美野里	市川敏昭	江崎美千代	山邊順二
大松友紀子	山辺洋子	山辺泰央	今原佳世子	黒田貴子	山田裕美
大場小夜子	渡辺泰子	八木博子	内藤喜美子	林栄一	林美代子
林孝	宮本和子	鷺見光太郎	林宏	林祖	村山あゆみ
小池康夫	木下泰子	豊公子	増倉洋子	杉田みのり	杉田幸子
北浦かほる	北浦将義	高田新子	北浦ひかる	北浦巴	山崎辰子
山崎一子	山崎正子	古谷博	古谷容子	桜井千恵美	石井牧
佐藤則次	浜口由利子	浜口龍太	塩津孝子	五戸孝子	三田雅子
中瀬勝義	高柳ユミ	加藤雅子	宮里美香子	玉寄憲太郎	大浜康宏
古謝里美	高里恵子	松崎治	松崎幸子	伊志嶺敏子	渡久山章
伊志嶺マサ	伊波恵美子	八尋舜右	八尋佳子	橋本悦子	中野陸典子
伊藤雅子	伊藤修	高橋雪子	平井和子	平井勤	原誠
尾鍋拓美	藤村健次	秋風千恵	杉井道子	西川祐子	茶園敏美
高野清弘	片野真佐子	仲程正子	島袋淑子	古賀徳子	桑原ヒサ子
松崎洋子	松本ますみ	加納麦子	加納穂子	平塚博子	神田より子
鈴木美和子	江頭晃子	長島祐基	小林信枝	浜地田鶴子	末吉栄三
末吉和	うえじょう晶	ムイ・フユキ	佐々木薫	安里昌夫	久貝清次
崎原恒一	崎原綾乃	崎原浩子	梅津弘子	梅津征一	梅津悟
梅津信	梅津結花	築山多門	築山慶子	菅野勝子	小野三夫
佐々木優	立川節子	田中強志	湯川百合子	松尾久恵	松尾敏子

三島一郎	松川裕子	三島瑞子	高橋正隆	安藤万寿代	森澤陽子
仲座初枝	田盛勝枝	宮良純郎	玉城功一	仲山忠篤	仲山春枝
江川義久	江川三津恵	大城ヤス	慶田盛みき子	潮平正道	潮平俊
潮平寛吉	潮平保子	仲本久美	仲本英基	慶田盛京子	慶田盛安三
新城由利子	山田守	桑名一男	大江政子	杉川洋子	慶田盛美智
糸教恭子	慶田盛用武	井上博明	江川義久	仲程久美子	仲程信次
豊川正晃	千葉裕子	千葉幹夫	崎山寛祐	崎山寛宗	崎山澄
崎山能子	慶田盛伸	慶田盛旬	仲吉良功	仲吉委子	仲吉司
仲吉哲夫	仲吉照美	松本昌次	大道万理子	和田倂二	黄英治
野川義秋	稲木信夫	吉田早苗	斎木健宏	長谷川仁美	西村健治
都築玲子	櫻井英一	佐伯孚治	小島晋治	石井和夫	上野千鶴子
沼田千恵	相方未来	落合芳	和田享子	東靖晋	中塚圭子
佐藤方代	伊勢俊彦	対馬果	上野敏行	杉本由理子	五味明憲
土松克典	大木孝子	出頭茂	米丸かさね	東栄蔵	東和子
石川欽也	石川裕子	荒木みち子	友利隆博	友利勝江	平良成子
神谷美智子	平良由美子	蔭山和代	砂川サダ子	砂川喜洋	砂川祐子
砂川美由紀	馬場史子	馬場基	小西光夫	小西美子	本巢文子
松村勇	松村順子	松村朝志	松村浩美	馬場俊	林政敏
林福代	石田悦子	石田浩	佐藤具之	米満美保子	戸川美里
本田正勝	本田牧子	風口妙子	風口英利	樋口英之	樋口恵子
樋口翠	樋口裕也	加藤洋子	中馬邦昭	中馬陽子	本橋富美子
三宅知子	小野良子	中山正雄	井原哲人	関谷栄子	久保木寿子
平賀明彦	宮崎茂子	久原知子	内山幹生	東美代子	上塚尚孝
菰原美紗子	菰原実	北島篤史	北島舞子	秋本知子	秋本賢治
秋本みどり	富山麻里子	富山大輔	田中恵子	田中誠喜	田中潤
田中ゆかり	用之丸理恵	塩山善暉	柏木千恵子	富屋晴子	富屋曜子
楠山忠之	楠山マチエ	真壁恒弘	真壁浩子	高島友子	北田幸恵
矢沢美佐紀	岩瀬宏子	佐藤千代子	長谷川啓	梅田百合子	川村千恵子
中島佐和子	大橋稔	山口永子	和佐田道子	篠崎美生子	

匿名希望 1名

一「本土人」として 1名

(計 484名。但し森宣雄方と鹿野政直方の双方で受けたため、少数の重複が生じました)

「戦後沖縄・歴史認識アピール」への「賛同者署名」「賛同者メッセージ」追加
(鹿野方到着分)

2016年4月7日現在

松浦幸子 高野和幸 宮崎治己 松浦正憲 坂本光子 倉地克直
今津勝紀 久野修義 澤山美果子 澤山玲 影山澄江 中積治子
三須宏子 山辺恵里子 平林夏美 若生由美 平林久
(計 501名)

2016年4月9日現在

上門吉照 上門冬輝 平岡奈月 平岡昌也
(計 505名)

2016年4月9日夕刻現在

月谷小夜子
(計 506名)

2016年4月11日現在

中出律 川手晴雄 川手そら 赤松小夜子 宮根一彦
(計 511名)

2016年4月11日夕刻現在

菊池雅栄 双木梓 鈴木亮湖
(計 514名)

2016年4月12日現在

桜井稔 浜田ミツエ 三枝文雄 五十嵐貴志子 池田資子
(計 519名)

2016年4月13日現在

西田勝
(計 520名)

2016年4月15日現在

島崎文緒
(計 521名)

2016年4月16日現在

橋本清貴 橋本静代 橋本清美 橋本ハル 橋本美世 安井和子
北田邦夫 高桑武子
(計 529名)

2016年4月18日現在

八木清道
(計 530名)

2016年4月19日現在

丸山幸子 佐々木光子 高槻玲子 花輪紀一郎 水野彰 炭口渡
本島静子 泉健二 福嶋常光 松尾幸昭 小海雄二 清田三郎
原屋美知子 井恩豊 小林裕 杉浦孝雄 長瀬継子 橋美岐子
青木葉子 伊東美智子 岡山輝明 市川淳一 恒吉英一 根岸哲也
藤原信一 渡辺琢磨

丸山洋明

(別紙) → 22 ~ 24号まで

(計 557名)

同日午後現在

岡田伊佐男 今村正一 谷口優子 福岡茂 川嶋英子 久保美也子
長浜久代 池田博一 木藤厚子 福岡智子 平田眞介 徳山由香
藤井郁子 齊藤直文 長野良次 須藤光夫 川浜尚子 田川哲夫
河津宏 山本晶子 大塚三紀夫 北山肇 栗林くみ子 上田治
北山正子 高橋富子 小柳政秀 里之園慶文 稲田米穂 國分徳子
直塚節子 長尾照子 諸富妙子 近藤正和 米持賢治 油本達夫

細野豊

沖縄は太平洋戦争での日本の敗戦から七十年後の現在まで、米軍基地問題その他、本土に比べて何倍も過重な負担を強いられてきました。かかる沖縄の苛酷な歴史を当然のこととしか認識できない菅義偉官房長官の発言に対し、沖縄と日本の戦後史研究者たちが抗議しています。この抗議に共感し賛同します。

福原恒雄

沖縄が、私どもの仲間である意識を先ず日本人の全ての人々が共有したいです。それが勝手に(私どもを無視して)“沖縄”を他に売り渡さない(ごく一部の者のために)ことにつながっていくと思っています。一人一人が自分を点検することも必要だと思っています。

(計 595名)

2016年4月20日現在

米川千嘉子 米川芳男 米川信子 米川善次郎 (計 599名)

前略

お預かりした署名、少ないですが、さし当り22筆お送りします。京都在住の方の署名がありますが、京都旅行の際集めたものです。お気楽ついでの集約でごめんなさい。それ以外は裁判傍聴の際集めたものです（この裁判は教員定年後再任用職員で任用更新を拒否された人たちの裁判です。無年金期間が始まっているのにひどいことです）。また4月上旬、「戸山が原で発掘された人骨の真相を究明する会」なる団体のフィールドワークで、参加者に署名簿とアピール文を配布しました。さらにこの日フィールドワーク中たまたま出会った散歩中の大槻峰氏にも署名用紙とアピール文を渡しておきました。そちらの方からもあるいは署名が届くかもしれません。

私は鹿野氏とはもちろん面識はありませんが、氏の著書にはずいぶん刺激を受けました。研究対象をその「内的」論理の奥深くに入って見なければならぬとする強烈な意識には、ともすれば「歴史的必然」などという文言だけの、分かったようで実は何も言っていない、予定調和的で目的論的な歴史理解とは異なる姿勢を見る思いがしたものです。特に支配・抑圧されている多くのものの内部に広がる錯綜した支配・抑圧・差別関係をこだわりなく見据えることの重要性に気付かせてもらいました。この度のアピールもそのような研究姿勢のしからしむるところ、単に琉球・沖縄史に関する修正主義への批判だけではなく、沖縄の現実に掘り込まれている歴史論理の政治的無視・本土（つまり私自身）の無関心が沖縄を一層困難に陥れているという現状認識と危機感から発したものと理解しました。

『世界』の「付記」にはアピール発信者4名が内閣官房に抗議するとともに、「市民の立場で、ひろく歴史認識をめぐる話し合いと出会いの場づくりができないか呼びかけるもの」とあります。これに沿って琉球・沖縄をめぐる歴史認識の話し合いの場を作り、その中で賛同署名を集めようかと考え、計画中です。しかしこれは時間もかかり、ごく小規模の集まりになりそうです。というわけで、4月23日までに間に合わせるということから、アピール本文を配りほんの少々アピールの内容を話すだけで、つまりは署名者はせいぜい署名欄の上記説明部分（アピールの趣旨は書いてありません）を読むだけで急ぎ署名していただくというやり方で、筆数だけ集めました。こんなやり方は沖縄「問題」を分かった顔してその場限りで論じつつ、実は自分の問題とせず従って都合良くいつかは忘れ去ったままにする本土サヨクの怠慢そのものと批判されても仕方ありませんが。

こうして署名をお願いしたある人から、この署名は誰に出すのかと尋ねられました。私の周りには自分の名前前で抗議したい人が多いのです。でも署名簿に宛名はありません。要請署名ではなく賛同署名ですから当然のことです。でもそうになると、出す相手のない署名なのか、四人のところに止まる署名なのか、それなら書いても意味ないや、となくなってしまいます。

私は次のように理解し説明しました。署名簿の署名欄上記説明には、アピールを署名者数

とともに内閣官房に手渡した、とあるので、続きの署名もそうなるのかと思われる。ただしアピール本文は戦後沖縄史の内実とそれに基づく菅官房長官への抗議、および本土の人間の歴史認識不足克服という課題への取り組みの呼びかけである。したがって署名者に求められているのは、アピールの内容を署名者自身のものとする、それをもとに議論の場を作ることである。誰に提出するか、また提出するか否かは述べていない、しかし少なくとも四人の方が政府に抗議することに賛同することにはなる。これで良かったでしょうか。これで良かったとして、私への質問者は、やはり間接的な意思表示にしかならないのだな、と理解したと思います。署名はしてくれましたが、

それにしても、アピール運動のこのあたりの部分には少し分りにくさを感じます。アピールの趣旨から言って、署名が意味するところは、署名を四人の方に使ってもらうところにあるのではなく、沖縄戦後史の公正な歴史認識を広げる活動を担う決意を表明するところにあるのだらうと思います。敢えて言えば、政府に抗議したい人は自ら展開する公正な歴史認識を広げる活動をもとに新たに自分(たち)で抗議をかたちにすべきだと、アピールは期待しているのだと思います。とするなら敢えて賛同の「署名」を四人のところに集約するよう求めるのはどのような意味があるのでしょうか。「認識」を他人の言語に委ねる単なる「署名」にどのような意味があるのでしょうか。求めるべきは、いささか厳密に言えばコメントのみではないでしょうか。なればそれをこそ強調すべきではないでしょうか。特にコメントを容易に書きうる研究者・ジャーナリストといった職業を持つ知識人に対してはそれをいくら強調しても強調し足りないと思うのです。

で、参考のため「付記」にあったサイトにアクセスしてコメントを覗いてみました。本土の認識の甘さを自己批判的に書いたものも多少ありましたが、多くは沖縄の現状を糾弾するコメントで、それを本土・沖縄関係として見直し書かれたものは殆どありません。中には「よくぞ発言してくれた」とか「賛同します」の一言といった「お任せ認識」としか読めないようなコメントもかなり多く、やはりそうかと思うとともに、ちょっとがっかりしました。

私は、「戦後沖縄・歴史認識アピール」を発した四人の方が、その発想の経過を明らかにしつつ個人的な心情吐露を含めてアピールとし、そのアピールに要請署名ではなく賛同署名を求めていることを批判しているのではありません。「認識」はすぐれて個的なものであり、認識を極めることを自らに課した知識人という立場は、要求の組織者などというものは別次元の存在だと思うからです。あくまで知識人として社会の「認識」への警告を続けてほしいと思っています。したがってさらにほしいのは、そして知りたいのは、「付記」でも述べられている、このアピールに感応した他の知識人の「認識」の表明です。特に琉球・沖縄史とは別ジャンルを専門とする知識人の、その専門に引き付けた「認識」です。そのような方のコメントが四人の方の次なる新たなアピールを生み出すのだらうと期待するからです。沖縄「問題」と原発「問題」の類似性はよく言われるところですが、部落・女性・障害者等を含めた差別全般もまた沖縄と同じ構造を持っているように感じます。

もちろん知識人ならざるわれわれ「一般人」は坪外だと言いたいものではありません。知識

人であれ一般人であれ「認識」を外部に表出したとたんそれは政治言語ともなり、論争は政治論争を含んで展開されるでしょう。ドイツにおける修正主義論争がまさにそうでした。そして政治言語が新しい歴史形成の政治運動を担います。その限りでわれわれ一般人が埒外にあるはずはありません。すでにして四人の方は行動する知識人として、内閣官房に出かけています。私も呆けた頭とかすむ眼、痛む腰を以て何ごとかをしつづけねばと感じています。実際にはたまに国会周辺に出かけ辺野古新基地反対と声を出す程度ですが、

その国会周辺で気付いた小さなことがあります。「沖縄を返せ」という歌です。1970年前後の沖縄闘争で、しばしば聞いた歌です。歌詞の最後に「沖縄を返せ 沖縄を返せ」とリフレインが入るこの歌は、佐藤内閣が進める沖縄返還を領土問題に限定する響きがあって、返せというだけなら佐藤と何の変わりもないじゃないかと思ひ、私はどうも好きになれませんでした。ところが21世紀の国会周辺で聞くとこの歌詞が「沖縄を返せ 沖縄に返せ」と変わっているのです。誰が何故いつ頃変えたのか知りませんが、助詞を一つ換えるだけでずいぶん意味合いが変わるものだと思ったものです。「沖縄による沖縄」の意味合いが加わっているからです。ちょっとだけ「沖縄独立論」を思ってしまった。

ただしこうした歌詞の変更によっても、本土と沖縄とは一体だと思ふ人にとっては沖縄というのは日本の一部である地理上の一地点に過ぎませんから、ほとんど意味に変わりがないでしょう。この際恐ろしいのは、本土と沖縄が一体だと思ふ人が、政治上・思想上の立場の違いに関わらず、広く存在しているやに見受けられることです。「一体」という認識は本土と沖縄の下部にまで降り立ち子細にそれを見るのではなく、自分があらかじめ持っている認識をパターンとして当てはめるところに出現するように思われます。「上から目線」です。曰く戦後本土も沖縄も苦勞して現在の日本がある、曰く米日支配層の抑圧下にある民衆という立場は本土も沖縄も同じだ、等々。それこそをアピールで鹿野さんたちが突いているのだらうと思います。

とりとめもなく長々と、だらだらと飾りのない、それでいてずいぶん引っ掛かりのある文章でごめんなさい。一献傾けながら、あれこれ弁解しつつ、ゆっくりと話しができる機会があればいいと思つてもみるのですが。

花の季節はまた花冷えもある季節、ご家族ともどもご健康でありますように。

丸山 澤明 揮

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同コメント

（「Change.org」サイトに寄せられた一部分）

勝手な「主観的な思い込み」で歴史を語る（改竄する）人々が増加している。特に、政治的権力を行使する人物が「主観的な思い込み」で物事を語る場合は、徹底的にそのアホさ加減を追及し、学問領域からそれらの言説を打ち砕いておかねばならない。（fujikawa masao）

素晴らしい声明文だと思います。日本本土社会の人間の一人として、心から賛同いたします。（平山 秀朋）

沖縄の方々ご本人、ご両親、ご先祖様は先の大戦で本土の防波堤になるべく戦ってくださいました。戦後は本土の何倍もの長い間占領下で苦しい生活をなされました。待ち望んだ本土復帰後は基地の押し付け。県民の姿に感動感謝した大田実中將が海軍次官宛に送った電文の結びです。「沖縄県民斯克戦ヘリ県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」。この中將の思いに答えた政権はあったでしょうか？（怒）（大橋 孝行）

本土に住み、沖縄の皆さんの苦しみの上に安穏とした生活をしてきた者として、償いの気持ちを込めて賛同いたします。（小林 正幸）

沖縄から真の民主主義を作りましょう。（木村 幸一）

沖縄の人たちの歴史を全日本の認識に！（Yamanaka Hidetoshi）

戦後10年後の生まれである自分は苦々しくも安倍晋三総理と同学年です。同じ時代を生きてきながら、その歴史認識において180度違うことに人間社会、日本社会の混迷を感じてしまいます。歴史学門外漢である自分にとって、この声明は大変な覚悟と勇気を感じさせます。日本の近現代史をまともに学んだ記憶のないなかでも、生きてきた事実と未来への責任において、沖縄から広島・長崎を経て福島に至る道筋の先にある日本の進む方向を見極め、平和と民主主義を子どもたちに受け渡したい！（須藤 伸彦）

本当に、よくぞ声をあげてくれたと感謝します。無力で無知な、しかし沖縄のことを考えること無しにこの国での歴史学はあり得ないと確信する研究者の一人として、連携させてください。琉球そして沖縄の歴史を見つめることで、単一では決してあり得ない多様な歴史の在り方を思うこと。現在も進行する戦争と暴力と差別に向き合おうとすること。広く開かれてあるべき世界を構想すること。無知で無力な歴史学徒の一人ですが、これら課題を常に手放さずにいきたいと考えます。（青柳 周一）

沖縄から世界平和を。（仲里 忍）

①声明に賛同します。②菅官房長官には公職者としての釈明を求めます。③政府においては「日本史における沖縄」について、とりわけ、「薩摩藩による侵攻と支配」及び「明治政府によるその継承」を含め、正しい理解を図るよう要求します。（羽柴 潤治郎）

偏った歪んだ歴史認識の修正と、反民主主義、反知性政権の退陣を求めます。（Takimoto Seiichi）

まったくです。文化財行政に係るものとして現政権の歴史認識は許しがたい！（田中 晃司）

警視庁機動隊が沖縄まで来て民意を鎮圧させようとしている。沖縄を守ろうとしている人々を犯罪者扱いして米軍基地の建設を推し進めることは沖縄差別そのものだ。（陣内 恒治）

1972年5月からまた日本国の領土に復帰した沖縄県、日本の一地方であるのにもかかわらず、多くの日本国民は沖縄についての知識がほとんどない。明治国家が1879年に軍隊を派遣して琉球国が「沖縄県」として近代日本に併合されたこと。日本にある米軍施設の74%が小さな沖縄県に集中する不平等など。沖縄史を知って大浦湾埋め立て、辺野古の新基地建設に反対してください。（Kaneko Martin）

沖縄をアメリカの生贖に差し出したままでは、日本は真の平和国家を名乗る資格はないと思います！（近藤美奈子）

終戦直後の歴史を見ると、当時の日本政府は、沖縄を捨て石にした後、九州を捨て石にする方向性で明確に動いていました。こうした中央から遠い順にあからさまな犠牲にしていくという構造は、順位立ての政治に立脚しています。それは必ずいつかは全員を踏みつけにする構造だと思います。沖縄の事を我が事とし、賛同します。（Sonoda Setsuko）

過去をきちんと振り返り、平和な未来を築くため、横にも縦にも連帯して現在を生きていきたいと思います。（牧野 晃明）

こんなにも平然と、人のこころを踏みこむことができるものなのだろうか。このような者に一国の政治を預けて良いか。良いはずがない。（太田 明夫）

沖縄の歴史は意図的に隠蔽あるいは無視されてきた。（新川 裕）

自由は責任をとる。自由なる学問は人類の平和のために行動する責任を負う。（井上 研一郎）

沖縄の方々の、受けてきた、痛み、苦しみを無視し続けるならば、それ以上の苦痛を自ら招来する事になる。日本も、アメリカ合衆国も。必ず。（田邊 優子）

「国を守る」とは、まずなによりも人の命と生活を守る事ではないでしょうか？アベ政権のやり方は一部の利益を守るために、人を盾にし防波堤にし、生活を踏みこみ続けている。その最たるものが沖縄なのだと思います。（藤井 智子）

歴史研究者として、本土の一市民として、満腔の賛意を表します。また、歴史研究者の「力不足」を自己確認しつつ、このような大きな一歩を踏み出された呼びかけ人のみなさんの行動力に、心から敬意を表します。（宇野田 尚哉）

声明の内容はもちろん、「付記」における「市民としてのみならず専門の研究者として、責任を感じるべき立場にある」という言葉に深く共感します。市民として、沖縄におけるむきだしの国家暴力に抗議するのはもち

ろん必要として、それと同時に、歴史認識をめぐる「公正」な議論の空間を切り拓くことが大切なのだと感じています。(駒込 武)

心揺さぶるアピールを発された呼びかけ人の皆様に深く敬意を表します。歴史研究者として、親として、近現代史教育の軽視による薄っぺらい歴史認識に、いかにして対抗していくか、正念場です。(黒川 伊織)

私たちがいかに沖縄の歴史をきちんと捉えていなかったことを知り、このことが日本政府の沖縄に対しての政策を許してきたと苦しくなります。本当に私たちの犠牲にさせていると言えるとおもいました。(大庭 千世子)

安倍ファッショ政権の戦争策動、沖縄・辺野古新基地を許すことは、敗戦の教訓と戦後日本の歩みをドブに棄てるに等しい。戦争体験者、その子にとっては人生の否定にも繋がる。歴史の歪曲に反対する。(Yorita Naomiichi)

いつまで沖縄が国の防衛線と思ってるのか!? 同じ日本国民であり、国家に属しているのに!! (菱谷 大三)

私は辺野古へ何度か行ってるが、辺野古こそ対話の最前線と思う。しかし現実には、防衛局は米軍基地の中に隠れ、機動隊とフェンスが分厚い壁となって立ちはだかる。政府の誰一人対話を試みる者はいない。どうせ対立しているのだから「対話の余地なく」という菅官房長官の発言こそ現在の日本、政治の墮落を象徴する発言である。対立する者が話し合う場がどこにもない。これがこの国の悲しい現実である。(本村 金三)

以下は韓国語の試訳です。韓国の人々とも共有できればと、拙いですが訳してみました。どうぞお使いください。(徐潤雅)

小さな声に耳を傾け、人他者の痛みに寄り添える人に政権を担って欲しいと思います。(與那嶺 照悟)

考え抜かれたアピールに、心より敬意を表します。(大門 正克)

オーストラリアより、本キャンペーンを強く支持します。(Shinnosuke Takahashi)

'기지의 섬' 오키나와에서 발신하는 평화의 메시지를 지지합니다! ('基地の島'沖縄で発信する平和のメッセージを支持します!) (JINnamib68)

Co-existence in peace (안미옥)

沖縄が抱えている様々な問題は韓国の事情と共通点が多い。他国のことではないと思う。(김준형)

오키나와인의 오키나와가 되길 응원합니다! (沖縄人の沖縄になることを応援します!) (장은석)

日本政府はこれ以上沖縄のことを苦しめないで欲しい (丕魯)

日本本土に生まれ育った者として、沖縄の人々と真の友となれるよう、向き合っていきたい。(岡田 由布紀)

諦めない事、繋がる事、前に進む事。こども達のため。(西川 豊子)

私たちは微力だけれど無力では無い。賛同します。(中野 由美子)

今、これだけ沖縄と日本政府のたたかいがヒートアップしているにもかかわらず、まだまだ沖縄の音を知らない日本人が多いのに愕然とさせられる。確かに義務教育の現場で沖縄の歴史等はほとんど知らされてこなかった。沖縄の歴史を共通認識しようという行動は、重要なことですね。(加藤 賀津子)

As an American with ancestral roots in Okinawa, I am very concerned with how the Japanese government is trying to force through the construction of a U.S. Marine base at Henoko. I am appalled by the callousness with which high-ranking Japanese officials can dismiss the pain and suffering of the Okinawan people. I am very worried that we will see more turmoil and possibly violent repression in Okinawa due to the Japanese government's missteps and misrepresentation of history. I am also ashamed that the country of my birth and education stands by and condones Japan's actions toward Okinawa. (Wesley Ueunten)

世界 1 月号を読みました。このようなアピールが出ることを待っていました。メディアでは、官房長官のコメントが出るものの、それについての問題点が語られず、常に素通りされている事にイライラしていました。このような人達に国の行く末を任せていることが嘆かわしくてなりません。沖縄の人達の声にしっかり耳を傾ける政府でない限り、辺野古新基地が暴力的に強行されてしまいます。これが大きいうねりになることを願います。(玉井 昌子)

出していただいてありがたいですが、ジェンダー問題について考えられていないのはとても残念です… (坂元 ひろ子)

日本国民の政府なら、米軍の基地に囲まれて暮らす沖縄県の人々の過酷さを解消する努力をすべきです。(金住 典子)

菅義偉官房長官の発言は、あたかも戦争の被害と加害を混同して一緒くたにしているようなものです。日本政府と「本土」の人間が、どれだけ沖縄の人々に対して理不尽なことをし続けてきたかについて思い及ばなければ、私たち自身もまた別の隷属から自由になれないと思います。日本と沖縄との関係は、アジア太平洋地域の人々に対する日本の戦争責任や戦後責任問題にも連なるものと思います。(小原 悦子)

これ以上、日本本土の平和という理由で、より強大な基地を沖縄に押し付けることには反対です。東アジアの平和化を沖縄の非軍事化から目指しましょう。(坪根 信幸)

知れば知るほど日本政府の沖縄差別が明らかになるし、自分が今まで知ったつもりになっていたことに恥ず

かしい思いです。今以上に沖縄に連帯を行動で表す事が知ったことへの義務であるような気がします。(富久亮輔)

中国や韓国に対する侵略、加害の歴史ばかりに目を奪われていました。沖縄に対しても同様の悲惨な歴史あり、現在も継続していることはあまり知られていないし、国民の関心も薄いと思われます。世論の喚起を期待します。(杉野 元)

辺野古新基地建設問題にかかわる菅官房長官の言動には人間性のかけらもないと思う。もっとも、菅や安倍に人間性を期待することはできないのだから、私たちが人間性を発揮して、沖縄にかかわり続けるしかない。(宮村 博)

沖縄の人々の苦勞、歴史を無視した安倍政権、絶対に許せません (池 照子)

沖縄のことを学ぶことはそんなに難しいことではありませんよ。菅氏。自分が生きてきた時代、住んでいる場所のごとしか理解できないなど、あまりにも貧しすぎます。それでは、自分が高校で世界史を教える意味がなくなるじゃあないですか。(中村 一郎)

太平洋戦争で沖縄の人達への戦禍への思いやり、謝罪の念の微塵も感じられない。菅官房長官の罷免を要求したい。(塩川 鎮雄)

根底から考えていくことで、安倍政権に対して、その象徴としての菅の発言に対して、はじめて納得のいく反論がなされたと思います。微力ですが、心から4名の皆様の後についていきたい。奄美出身者の一人としての思いもあります。(水島 英己)

すべての戦死者のために私たちは安倍暴政を許してはいけません。戦後生まれ？戦争を知らない？それは言い訳。想像力と思いやりの問題です。(倉増 信子)

私は戦後生まれなので…云々といった世代論で無責任が赦される訳ではない。占領の意味が本土と沖縄で同じものでないことは明らかで、結論はどうあれ、基地政策は形を替えた占領論なのだという認識をもたなければ、ならない。(Kei Gunji)

菅官房長官の発言の「認識不足と無責任さ」には恥じらいのかけらもありません。なりふり構わなくなった政権を的確に象徴していて、恐ろしさと憤りを覚えます。(Norma Field)

今までちゃんと向き合わなかった事を 謝ります。沖縄の歴史をもっと学びたいです。(山本 純)

沖縄県民です。沖縄は捨て石作戦による地上戦で米軍だけでなく日本軍による虐殺もあり20万もの犠牲者が出ました。戦後は土地を強制接収され、70年たっても県面積の10%が米軍基地です。沖縄県民の過重な負担や痛みを全く理解のない沖縄基地負担軽減担当大臣とは思えない菅官房長官の発言に県民は深く傷つきました。断固抗議します。(金城 かおり)

私は、大学卒業の1970年2月～3月にかけて、愛楽園にボランティアに伺ったことがあります。わずか3週

間でしたが、私たちがバスに乗車中、ジープに乗る米軍の横柄な態度・いやがらせに何度か合い、憤ったことを忘れません。沖縄の方々には、唯一の地上戦で、そして戦後70年もの間辛苦を強いていることに申し訳ない思いと菅官房長官の発言に憤りをこめて抗議します。(谷森 櫻子)

賛同します。声明文に歴史研究者の矜持を見ました。沖縄と日本の戦後史を学び直し、長年続いてきた沖縄差別を今こそやめるために声を上げましょう。(鬼頭 暁史)

沖縄の問題は、東京で仕事をし子育てをしながら暮らす自分自身の問題であると再認識しました。「信頼を結びあう思想的回路」の末端でありたいと願うと同時に、沖縄の歴史を胸に刻み、「平和」をつくり直す担い手の一人になりたいと思います。(福島 浩治)

歴史的な連帯が始まっています。本土の人たちが沖縄への関心が薄かったのは、差別という以上に、沖縄の、本土とは違った歴史への無知が大きかったと思っています。とりわけ戦後史…1952年から72年までのこと…。このアピールは沖縄史を研究してこられた方からのやむにやまれる声と思いました。多くの方に読んでいただきたいものです。(高阪 由紀江)

昨今、自分自身の「研究」にのみ没頭して、仁が今生きている世の中にまったく関心をしほめすことのない歴史研究者が見られる中で、現実世界と自分自身の研究との関係を真摯に考えてその責任を自覚し、勇気をもって発言されたこれら4人の方々に敬意を表します。歴史研究者は、このような時に「声を上げる」ために、研究をしているのだと、思います。知性も理性の論理性も感性も品性もない、現在の安倍政権の人たちが、この声明の意味を理解できるのか、注視したいと思います。(高橋 知文)

菅さんも反知性主義なのではないでしょうか？協議の前に相手の置かれた立場等を調べて臨むのが筋、または礼儀つてものではないのでしょうか？(理枝 中矢)

私も大阪の人間ですが矢張り沖縄の戦後を今以上に伝えなければ沖縄の人の気持ち、考えは分からないと思います。(横山 太郎)

本土の方はちゃんと沖縄は元々琉球王国だった事。中国でも日本でもアメリカの土地ではなかったことを学ぶべき。(下地 正紀)

沖縄問題は全ての日本人の問題。歴史をどう認識するかに未来がかかっています。(山口 里子)

「本土」側の人びとには、「沖縄は日本の一部」ではなく、「沖縄が日本」という認識を持つことが求められているのではないかと思います。沖縄といわゆる「本土」の間の壁を乗り越えるための第一歩として、沖縄で起こっている問題を自分の問題だと捉えるために。(川添 智史)

歴史に真摯に向き合い、考えを深めていくことが重要です。そこから個人の尊厳が何よりも大切であることの認識に至ります。(宮城 隆志)

戦争で最も苛烈な戦禍を被った沖縄の歴史や境遇を真摯に見つめること。そうして初めて戦争の事実を整理し未来を見据えることができるのであり、為政者にこそそのことが求められているのではないか。(竹之内康輔)

”自分が沖縄に住んでいたら、本土の人達のことをどう思うだろう？”こう考えたのが出発でした。沖縄の人達の本当の願いに寄り添う努力の中で解決策を見出しことが大切だと思います。(滝川 恵津子)

菅官房長官のこの発言本当にひどいと思います。さらに、沖縄県に対する対応のひどさはあまりにもひどいと感じてやみません。長年犠牲を強いてきた政府として反省をして、沖縄の自己決定権を認めるべきです。まだ遅くないです。(岡原 美知子)

沖縄の苦悩の根源は、本土の首都東京の責任です。(梅原 利夫)

まったく同感です。伯父が琉球政府立法院事務局に在籍した関係で1953年5月琉球政府立法院事務局編「琉球法令集」を読んでも又、私の実兄が昭和48年(1973年)12月20日岩波書店発行の「沖縄のあしおと」(ペンネーム一福木詮)を読んでも、いかに菅義偉官房長官の発言が無教養でひどい発言であるかが分かりマスコミ報道が問題を指摘しないのか不満に思っていました、よく勇気を持ってアピールしてくれました。(嶋袋 豊治)

あの時の言葉は、国民として絶対に許さない。恥を知りなさい。本当の歴史を学び直しなさい。(土屋 一子)

本土から沖縄へ基地負担を押し付けて、のんびりと平和憲法を享受して半世紀生きてきました。これ以上、沖縄に対する理不尽に手を貸したくありません。(高橋 明子)

「公正な歴史認識」という用語についてはもう少し説明していただきたいと思いますが、とりあえず賛同は致します。(伊藤 陽寿)

巨大化する中国。そんな中国と平和的に共存するしか沖縄の生き残る道はありません。軍事衝突をしては、また日本の捨て石にされるだけだと思います。20年後、50年後に沖縄がアジアの平和の架け橋になっていることを希望します。(外間 永邦)

今わたしたちは、本当の民主主義の確立を求めて、考え、行動することが求められていると思います。重要な時代に生きているのだと思います。沖縄の現代史を知り、行動することが、民主主義の日本を作り出す道へ続いているのではないのでしょうか。熟読しました。そして自分は同様のことを考えたかったのだと思いました。(小堀 俊夫)

最近沖縄の歴史を勉強し始めた者ですが、正しい歴史認識は正しい未来を構築すると考えます。沖縄から発進されたこの運動が沖縄のとどまらず日本の正しい歴史認識にたどり着くことを願います。(yonaha keiko)

歴史認識を、密約のところからでも良いから、日本の報道機関(チャンとがんばってくれているところもありますが)しっかりして!と。(酒井 雅江)

*編者より：他にもたくさんの賛同コメントが寄せられていますが、紙幅の都合上ここでは、声明に直接対して、そこから応答するようなかたちで述べられた意見・見解を載せてみました。すべてのコメントはウェブサイトでご覧いただけますのでご参照ください。(森宣雄 2016.4.22)

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

Yoshio MORI	細川 甚孝	高橋 寿江	高良 幸哉	Yoichi	井上 浩幸
当間 ひとみ	川尻 ひろし	松木 完之	Arai Maki	浜口 克己	Kohata Yuji
長田 茂	比嘉 聡	渡辺 眞弓	小沢 節子	坂野 鉄也	yoshifumi okada
茂 杉山	higa chikara	丹羽 敏子	ヒラキ シゲキヨ	大串 潤児	鈴木 眞智子
角住 憲一	鈴木 公子	美藤 眞澄	宇崎 里佳	中村 武司	真辺 将之
波名城	仲村 良太	木村 幸一	足立 鏡平	福田 里英	Mochizuki
Uechi Hideki	小西 喜代次	山田 穰	青柳 周一	Wakui Takaaki	Hiroyasu
masaaki sasaki	藤本 吉則	山中 春苗	北原 伸男	中野 良	yazawa mayumi
垣花 照夫	江田 桃子	藤川 廣行	OKUYA KEIKO	和泉 直樹	Yuuji Iha
金田 静江	小黑 譲司	岡村 輝彦	ミワ リキヤ	藤永 壮	Homma Yoshiaki
伊波 祐一	川口 伊智子	北野 由美	Yamamoto Tbhru	Fuji Masa	Kodaka Norio
細川 豊史	玉城 耕太	Takeuchi	Higuchi Yuchiko	昌毅 野村	マシオン 恵美香
hamasaki	福与 純二	Tsuyuki	新垣 誠	松原 康彦	ishizuka sae
hiroshi	美加代 金武	山田 明伸	小野 保和	稲村 太郎	小林 達志
Endo Tomoko	尾内 浩子	真作人 池田	Harada Keiichi	中野 聡	旭 洋一郎
nojima kentaro	平山 秀朋	池田 輝幸	森 幸子	糸教 都	岡田 知弘
fujikawa masao	近藤 富男	小野寺 真人	船原 知奈	梅崎 透	杉浦 薫
藤永 康政	坂口 ゆう紀	網野 恵美子	只友 景士	前田 佐和子	羽柴 潤治郎
庄司 隆	相原 宏	古橋 瑞雄	河西 英通	平井 美津子	MITSURU
友利 玄清	城間 盛松	慶照 林	一盛 真	山下 敬	GOZU
外間 裕子	寺岡 豪	TAKEDA Shoji	内木 志保	丸山 淳司	iwama hideki
kishino reiko	浅野 敏勝	平野 潤	林 道郎	西脇 尚人	日野 政昭
永井 洋	我妻 弘	Kono Makoto	小勝 礼子	藤井 寿一	Kobayashi
大城 勲	木下 弘美	峯 良一	Namiki Kayoko	YAMAGUCHI	Daisuke
守屋 勲	川田 悟	山尾 あすか	塚原 哲也	SHOICHIRO	中村 まき
小林 悦郎	大橋 孝行	山中 秀俊	松尾 陽子	桐野 作人	高山 洋輝
石田 徹	Sugimoto	三橋 康治	荒井 剛	丸岡 忠裕	足立 和子
小橋川 誠	Mituhiro	Negami Ken	KOBASHI	Taniguchi	梅崎 寛
林田 隆一	岡田 佳子	伊藤 一郎	TOSHIYA	Michiyo	Takimoto Seiichi
島 武志	小林 正幸	須藤 伸彦	黒川 みどり	秋月 望	五郎丸 聖子
イトウ ヨリコ	新井 治	Kanaya	Tokumoto	Nakamura	近藤 直人
阿部 悦子	高橋 姿子	Fumihide	Toshiaki	Hiroko	未知 源訪
OGATA	金澤 知成	山内 英	古屋 泰	林 さやか	阿知福 隆雄
YOSHIHIRO	木ノ瀬 亮平	板谷 周治	武田 俊輔	神代 知花子	早尾 貴紀
瀧 政司	ササキ タケミ	SAKASHITA	森本由美子	須藤 伊知郎	宮嶋 一男
黒木 信頼	工藤 歩	Yumiko	堀越 直樹	米須 清真	塩澤 紀子
太田 曉子	関屋 裕介	橋田 智哉	崎濱 紗奈	羅 真一郎	内藤 翔太
Okuya Tshihiko	Tani Fumiyo	乙原 雅弘	仲里 しのぶ	Ooka Satoshi	照屋 純子
	Miyara Mina		Nakamura		

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

上沼 由彦	石橋 由佳	小林 准士	松城 かずみ	牧野 晃明	田村 幸二
Kawahara Palla	鈴木 充	幸 隆夫	服藤 早苗	宮城 康博	仲地 秀成
Kazuhiko	福本 俊夫	小林 信三	Nakanishi	土井 弘高	木村 理恵
堀江 有里	Uesawa Daisaku	清水 きよし	Chiahun	Sakashita	泰宏 若松
森 美智子	大月 英雄	Saitou Kazukiyo	Nakayama Jun	Fumiko	Ito Ruri
Miki Brecht	山城 順	宇都宮 毅	奥平 一夫	福田 展也	福地 義広
富村 友子	堀 慶子	永田 秋	岡本 哲軌	林 和雄	山内 晋次
山根 巧	近藤 明香	藪野 豊昭	吉田 一人	村松 真理子	鶴田 一寿
Kaneko Asami	作野 均	杉本 典夫	島畑 与一	太田 明夫	Shinohara
山本 剛和	熊谷 雅弘	村田 涼子名	ミカ ノジマ	佐藤 泉	Koichiro
駒田 和幸	片野 真佐子	清野 初美	高根 勝啓	谷上 隆	高 碩煥
比嘉 理麻	田中 美可	日暮 美奈子	星野 英一	Barbara	備仲 臣道
臼井 盾	山口 信子	asako takubuchi	魁生 由美子	Froehlich	前田 徳弘
藤野 由紀	貴堂 嘉之	ono sho	高瀬 正徳	田邊 昌雄	Ikegami Yoshiki
村松 良雄	清水 綾巳	橋本 誠一	米光 祥子	石川 忠	森 麗紀子
川平 いつ子	河西 秀哉	Urasaki Ayumi	野田 真世	男姓 太田絃志名	半澤 浩継
加藤 哲夫	Kuhota Mio	Aoyagi Hiroshi	大越 衣真	李 明玉	呉 光現
教子 羽角	兼松 美里	清水 与志雄	砂川 幸児	三原 容子	山本 光一
三輪 久美子	海老原 幸夫	花元 潔	小澤 浩明	あいはら さちこ	ねがみ しげみ
東浜 妃敏	陣内 恒治	城間 エリカ	川辺 雄	Mayumi Oishi	Seo Yuna
宮崎 比呂志	小野寺 秀也	水島 明	寺川徹	大野 祐子	Kondo Misako
加藤 雅俊	ひろし かとう	関 耕平	hamada maya	佐藤 憲弘	yoshida ai
Kusakabe	稲垣 文達	根本 淑栄	村松 志門	川口 陸行	Kim Manri
Nobuyoshi	ishihara	伊藤 俊子	Yoshida Koichi	小幡 尚	渡邊 雅央
島田 タカフミ	masahide	浦瀬 佑司	Naoko Tanaka	岡田 健一郎	Akatsuka
山岸 祐子	藤田 明良	山本 昭宏	足立 智美	Taira Tsugiko	Hiroshi
Ninomiya Kano	大城 洋子	kanno shuichi	Isoyama Yoshimi	Odawara Rin	福井 正敏
田中 弘美	後藤 哲男	大橋 幸泰	坂本 節男	清原 睦	眞城 百華
酒井 俊朗	Chibana Akira	福岡 正章	新居 万太	後藤 悠一	増田 英之
関根 弘二	Kaneko Martin	佐藤 麻子	Ueda Hiroko	yajima akiko	松尾 慎
田中 晃司	Oyakawa	片山 敬身	Sonoda Setsuko	芦川 晋	寺田 和子
吉田 うらら	Shinako	岡本 幸子	阿部 信雄	山内 さかえ	矢野 頼子
中村 泰子	中村 喜美子	板倉 美奈子	武川 珠	後藤 彰信	理彩 徳永
赤嶺 ゆかり	北條 良至子	日高 由貴	Cocone Hyromy	野田 清一	玉木京子
綿貫 公平	竹間 紅美	Tasaku Miyagi	中西 裕樹	北城 優	伊藤 聡子
今井 忠博	木村 和史	大嶋 美映	照屋 隆司	千葉 親子	清水 史彦
山下 千尋	田仲 宏之	星野 英一	内藤 誠治	森 のぞみ	大田 美和
ほり みか	近藤 美奈子	番匠 健一	大嶽 恵子	大久保 浩	沼田 祐子

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

中島 さちこ	佐野 卓志	志賀 正典名	とやま よしこ	中村 康男	本多 裕美子
Nishimura	Irabe Momoko	宋 基和	和田 悠	小貫 耕喜	及川 英二郎
Isaharku	村上 克尚	國分 金井 美生	松岡 和子	新井 健二	川本 博美
賀来 知二	小林 肇	輝 広志	sonny ochiai	坂本 美鶴	金 徹
萩原 園子	松田 正	斎藤 純子	永瀬 里子	新井 聡子	山根 和久
重宗 達夫	山谷 賢量	奥田 のぞみ	中 順子	宇野田 尚哉	知名 和子
二石 将志	小浜 正子	今徳 芳子	吉井 弘和	Kuse Masaki	佐藤 文子
杉山 茂男	佐々木 愛	nagano mari	廣木 尚	末松 良道	新田 龍希
渡真利 哲	佐藤 勉	長澤 政之	近藤 依子	聡 古賀	上田 美和
新川 裕	NAKAGAWA	芥川 忠正	風間 薫	酒井 博行	佐藤 祐
谷藤 律子	KENICHI	柿沼 美沙子	田邊 優子	高橋 類子	内田 かおり
Kouno Makoto	TAKEDA	田崎 耕次	Suzuki Taku	畠尾 よしえ	渋谷 直子
岸本 眞奈美	Masahiro	仙名 怜子	蟹野 武彦	赤江 雄一	穀 北村
古沢 希代子	Shiho Asakawa	今井 宏昌	依田 徹	藤井 かえ子	大野 京子
佐々木 拓次郎	赤塚 昌俊	横田 忠夫	中田 浩	尾島 キヨ子	佐々木 健正
内田 理	Murata Yumi	飯塚 和彦	石川 亮太	西井 麻里奈	みうら としき
Manabe Kaoru	岸田 久恵	坂野 徹	和田 和人	松浦 春海	宇佐美 陽一
東 美智子	井上 博之	井上 研一郎	浜田 光	きくち あきら	yanai yasuko
伊藤 康也	大田 英昭	大江 和夫	豊島 晃司	清水 順子	清水 智世
竹内 久順	高安 徳	島原 登志郎	Ogasawara	川崎 洋一	金津日出美
菅野 芳秀	渡名喜 大介	大橋 良	Kimiko	Sasaki Kei	松田 洋介
岡 美由紀	松下 泰之	池上 大祐	吉良 智子	田瀬 望	岡本 尚文
濱野公二雄	太田 信成	竹山 克則	Mukai Norihiro	iwaehima fumi	中島 万紀子
濱野京子	蔦地原 初子	齊藤 亘	遠藤 かをり	徐 小潔	小宮 愛
町田 幸	となき よしたか	渡邊 裕一	Matzda Satoshi	名取 保美	大石 眞吾
松本 和樹	太田 雅子	太田 規之	川口姓 重雄名	Iwasaki Mamiko	駒込 武
毛利 孝雄	noriko heller	中嶋 弘行	西村 誠	金 洪仙	久保 喜久夫
伊藤 友佳子	榑下 浩也	あさ子 増淵	兼子 歩	原田 葉子	竹内 栄美子
中村 香	徐 京植	Asato Yoko	萩原 智明	船越 裕和	上坂 和子
与那嶺 聡子	okumura	Izumi Masumi	吉崎 直実	郁夫 伊集院	冨田 きよむ
太田 豊湖	yoshimi	柴田 健	西尾 典晃	Sachiko	Namiko
鈴木 真紀子	hashimoto iku	大津 佳子	藤井 智子	Iwabuchi	Takahashi
本田 順子	片桐 武夫	山本 隆	MASAO	一色 哲	mitsutake
井上 力	成田 千尋	motoaki	KOJIMA	miura takayuki	atsuko
三枝 秀晴	上関 陽子	masakatsu	井上 晃	荒木 彩代子	Shimoyama
内藤 希	奥川 櫻豊彦	中村 平	柿木 伸之	川口 悠子	Takashi
阿志賀 浩昭	福山 幹夫	奥 世宗	片岡 久美	森 耕一郎	国吉 志保
二関 知美	杉村 あかね	MIDORI	Kohagura Kei	堀本 実花	古市 眞人
		TANAKA			

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

小石 巳美	伊藤 秀夫	橋本 みゆき	細江 初美	洪宗都	原田 茂
渡辺 正恵	松本 陽一	田沼 正平	沖 和史	草山 義博	宮崎 善久
泉 恵子	河又 俊明	岸川 いづみ	大津留 公彦	沼村 健	male Fumitoshi
小池 洋子	内山 裕子	黒子 千恵	細野 一郎	大門 正克	Sakurai
阿部 龍一	荒田 幸信	福田 恵一	松島 大	河崎 かよ子	馬場 秀幸
細野 千恵子	齋藤 義則	まつだ ゆういち	藤藤 虫丸	芹澤 廣衛	鹿子木 徹名
大場 美登里	金城 史彦	Akiko Abbazi	権藤 泰	小田原 栄広	大塚 理恵子
米村 悠	矢野 真崇子	嶽本 新奈	西村 三奈子	角島 朝子	友明 黛
MIYAZAKI	奈良部 泰三	谷部 弘子	飯田 敦子	Umemoto	nakajima masao
YAYUMI	伊藤 二葉	永田 勝之	大井 和明	Takeshi	조여울
衛藤 英二	野間 淑美	Yorita Naomichi	EGUCHI	神山 卓也	김능조
衛藤 順子	ユイダ リョウコ	Ishihara Shun	SATOSHI	武藤 一羊	Kitagawa
大城 道子	比屋根 芽衣	中島 勝	Shoji Tokida	藤野 雅之	Satoshi
靈岳 和子	末広 恵美子	Nakamura Saki	hidetoshi	加藤 陽子	東 亜由子
佐野 浩	Nishide Mariko	大庭 千世子	sugisaki	Yunshin Hong	정성원
伊藤 京子	Jun Hanashiro	桂田 文也	岡本 麻路	志治 美世子	中川 裕子
内田 すえの	門沢 健也	喜三 高垣	坂上 哲也	伊沢 令子	잔미이
中島 悦生	牧田 正樹	久住 猛雄	takemoto ayumi	中田 順子	ハンギョンソン
大久保 生子	土谷 秀作	松澤 徹	與那嶺 照悟	谷口 真也	矢ヶ崎 克馬
山田 はるか	須賀 房江	前田 正宏	Sugomoto	小島 さつき	박동범
Yamamoto	鈴木 明子	神谷 隆	Tomohoko	正博 浜田	水谷 明子
Masaru	富永 辰男	池川 れいこ	木下真治	原 毅	홍희승
Nagano Takashi	jun kanemura	溝井 守	タケムラ シゲキ	山根 和則	むた おりえ
笠原 卓也	萩原 世志成	高木 秋子	五島 良子	Aoyama Kaoru	Kamiya Fusako
Tomabechi Schin	長澤 健祐	高木 和男	nishi masumi	saiki tomoko	柳沢 裕子
Miki Manami	矢ヶ崎 馨	吉田 洋太郎	Hayashi Yoko	荒川 仁平	小島 直子
柿澤 達郎	川瀬 信江	本村 金三	akinori gomi	加藤 愛子	趙慶喜
宇山 祐明	花山 知宏	菱谷 大三	Irhe Sohn	ishikawa koichi	稲本 恵子
八木 孝夫	yukari	saito masaya	野原 マキ	仲宗根 純	豊見山 和行
Ono Junichi	steinwedel	平田 ヒロ	廣瀬 岳幸	石塚 道義	石井 良重
伊藤 慎二	柏木 幸雄	寺田 悠人	Serious Fumble	田北 光一	KIYATAKE
黒川 伊織	久貝 典子	佐藤 恵	LimBorah	高橋 昌明	Moriya
小林 朗	Teraoka Aya	岡 勇次郎	谷 さわの	八木 孝三	西村 直登
小嶋 茂穂	波多江 正美	吉野 陸幸	jeongdami	Kume Hitoshi	Ryuta Nakajima
水上 幹雄	綿引 悦朗	鈴木 宏昌	Jung Shinhyeok	塚田 花恵	時安 邦治
奥村 幸夫	山本 清志	Sekiguchi	Joo Hyun Sheen	土屋 誠一	李在庸
桂 牧	田中比呂志	Haruyuki	山本 みはぎ	菅谷 幸子	임경희
ishimoto leonard	権藤 文代	竹本 義人	小川 正人	Uematsu	牛山 元美
			InMinjee	Kimihiko	Shin Takahashi

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

飯田 宣子	大川 美智子	徳馬 ヒロ	網中 和子	佐々木 佐知子	安田 寛
若山 大地	Yamaguchi Kei	新居 晴幸	成沢正博	Takao Takahara	湯田 美明
原 東幸	梅津 俊也	濱野 一郎	中川 裕之	成田 龍一	鈴木 則子
阪田 清子	森園 かずえ	前川 敏 (タカシ)	前田 波雄	Wesley Ueunten	Ted Motohashi
Fukutomi Yuka	山内 小夜子名	宮城 晴美	井上 真紀子	西山 進	坂井 亮太
全盛源	田中 奈緒	川嶋 玄	岡崎 杏子	石川 旺	和男 冨田
入間川 正美	Nakano Kazuko	中野 由美子	吉田 弥生	小松 寛	斎木 裕佑
ParkSohyun	きむ きがん	嶺岸 剛	shirouzu toshiko	久保 多美子	kosuge hiroschi
JeongJong-joo	衣川 順一郎	瀬川 均	齋藤 星耕	井上 直子	矢野 恵理子
若山 一博	市居 みか	笛田美智男	加藤 賀津子	井上 誠	川原 和代
菅瀬 晶子	岡田 由布紀	中野 博光	高橋 与実	玉井 昌子	荒井 務
辺倉 幸	斉藤 さちこ	michiyo fujioka	山本 ふみ子	坂元 ひろ子	堀内 俊二
Ko Eunjin	武田 真也	鄭 貴美	松本耿郎	藤田 紀子	小原 悦子
Nozaki	장은석	鏗 史朗	川上 慶太	新垣 裕子	浜 邦彦
Yasunobu	飯田 裕子	佐々木 あずさ	青木 裕美	鹿島 潤	Watanabe
백현남	KOOSUNNY	叶岡 宣介	平林 祐二	上原 こずえ	Tatsuo
川野 雅巳	権 紀子	李 まり子	仲丸 則雄	三原 芳秋	Takao Sugiura
ahnmiok	戸田 立哉	山崎 正	Tomomi	今井 恭子	鈴木 敏夫
國奥 睦子	西川 豊子	新田 學	Yamaguchi	佐川亜紀	関口 暁子
이진선	KoHee yoon	上関 洋子	ikeya akira	丁 章	川瀬 朋子
김재형	小寺 美和	牧野 恵之	中野 敏男	高橋 武智	岡部 幸江
조승	橋本 あきこ	菊地 利奈	Yoshihiro	Tanaka Yasuhiro	太田 徳夫
関口 香奈恵	吉田 明彦	松田 毅	Yakusige	田代 美江子	inoue fumi
Yoko Mitsui	西野 真由美	寺下 眞治	前田 文志	増倉 洋子	MORI Yoshio(堀 場清子代理)
安藤 公門	鉄井 孝司	中野 修	柏原 由美子	平良 宗潤	堀江 節子
高松 恭則	濱崎 耕一	友田 シズエ	児島 博紀	中根 秀夫	坪根 信幸
木村 靖司	高橋 美弥子	朝倉 美江	三苫 利幸	大坪 正敏	澁谷 絹子
小寺 隆幸	小牧 みどり	北村 めぐみ	木村 厚子	清水 澄子	浜野 信宏
森谷 幸	宮平 真弥	斉藤 健一	山本 勉	川瀬 貴也	鈴木 孝
岩川 藍	Yo Iizuka	金住 典子	Awoki Yuichi	正晃 武知	真喜志 淳
段田 亜由美	星井 洋一	上地 聡子	浜川 智久仁	近藤 亙志	中山 陽太
Kazami Sora	山口 剛史名	奥山 慶一	本間 喜久男	Kimura-Steven	星野 直之
勅使川原 香世子	小林 正義	呉津 弘喜	Saito Kei	Chigusa	澤口 香織
차창진	ishigaki kinsei	倉上 厚子	keisuke mori	中村 勢津子	横川 大輔
山田 輝世	檜山 智弘	申 知瑛	齋藤 大	鈴木 謙二	Uchikoshi
三戸 清恵	北村 直子	志水 幸生	Min YoungGi	Hiruma Noriko	Sakura
村柄 振	有川 哲雄	西園寺 美希子	田中 太郎	水上 和恵	乾 えり
片岡 勝則	安田 秀之	水野 眞喜子	Yukari Saito	増田 望	

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

清野 かおり	今田 和歌子	西村 由美子	風岡 優	玉置 行	小木曾 洋
Yosikaha	中川 茂	江口 昌樹	三宅 江	塩川 輝雄	藤田 実
Yositoki	上村 早苗	竹内 八恵美	牛島 稔大	水島 英己	松本 憲明
深沢 健一	Kuniyoshi	竹間 優美子	堀本 尚宏	豊田 文雄	田地野 亜紀子
松浦 まみ	Masafumi	山邊 一哉	市川 昌和	矢崎 成人	櫻庭 ゆみ子
Yukiko Hanawa	宮村 博	朴 福	平野 啓一郎	山岸 信一	Okamura Yuri
橋 佳代	我部 聖	Yoko Harada	照子 池	長嶺 敬	美麗 琉球
Murakami Yoko	石田 遇由美	Ito Arata	関 三信	片山 めぎほ	添田 すみ子
青野 聡	深田 義久	遠藤 恵子	sakai kentaro	田中 新正	Kei Gunji
松村 直樹	おかだ まや	権野 浩	吉田 正司	松島 俊也	三浦 一浩
長尾 詩子	檜皮 瑞樹	磐田 英夫	岡野 彰弘	勝山 泰佑	哲彦 村田
高野 哲郎	大熊 ワタル	Hidetoe Oba	福田 弘	山田 康博	リサ ヨネヤマ
あかね 早瀬	乾 喜美子	黒田 晴之	Kim Hyesbin	日下田 尚	坂井 正明
千々松 泰明	Ueno Atsushi	高橋 陽子	佐藤 剛	gunji takashi	寺中 誠
白井 芳江	川上 明子	吉岡 章子	須藤 道子	川口 祥子	藤田 武志
杉野 元	大槻 オサム	海老原 梨江	亀井 みさ子	中野 満	大塚 明
金 富子	金山 智子	大串 和雄	八ッ井 憲一	Morimoto Atsu	藤岡 寛己
Murata Mayuko	Yamaguchi	Nukui Reiko	小形 克宏	濱田 マキ	Richard Toyama
原口 宏司	Akihiro	高橋 美里	山中 章	戸田 晃	豊田 直子
後藤 雄介	河本 明代	服部 昭人	鷲見 博義	MORI Michi	川村 勉
小川 洋	中垣 啓	阿部 和枝	茂木 慎吾	倉増 信子	津田 泰志
小寺 京子	田場 祥子	山中 和由	高橋 潤	橋本 雄一	小林 清治
Muraki Ichiro	田場 洋和	野村 紀子	Takaoka Naomi	Kasuya Takako	高橋 新
徳根 和幸	吉野 友二	増田 弘邦	城田 純生	成澤 孝人	福田 健
幸生 よしや	岡田 寿美子	Shimura Yoko	対馬 洋平	早川 征一郎	小城 智子
櫻本 清	下条 道夫	古道 吉男	佐々木 玲子	井形 和正	Kojima Kaoru
大日方 純夫	田中 優行	Kobayashi	yoshizumi	翁長 星	長谷川 武広
広中 由美子	AKASAKA	Chikako	tamiko	松尾 勉	喜久本 藍
倉田 千鶴子名	KYOKO	伏見 均	石毛 恵美	Hashimoto	Norma Field
浦井姓 純子名	安藤 節子	宮野 寿美子	中村 一郎	Ayumi	佐野 教至
深澤 久雄	澤田 和也	佐藤 英理人	関内 旬一郎	飯島 俊子	水野 浩重
佐々木 智美	高木 澄子	原屋 美知子	Masamichi	鍛冶 安子	小林 睦
矢澤 新一郎	Yoshikawa Yukio	武藤 徹	Inoue	Ishida Hidetaka	高橋 公徳
宮内 尚文	洋子 柴	西村 信雄	藤田 和彦	戸田 進	井上 航
清水 優子	村田 泰美	糸永 辰文	立石 朱美	小寺 春人	川上 秀明
中川 明美	新原 三恵子	守山 義一	斉藤 宣広	梓澤 登	井出 匠
大川 武宏	Tsukamoto	増坪 一三名	村田 博	MASIKO	石井 朋一郎
須納瀬 淳	Sachiyo	斯波 弘行	踊 うたまる	Hidenori	筋夫 鈴木
					Tazaki Riku

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

明星 圭介	高阪 由紀江	遠藤 竜太	堀江 雅博	本庄 豊	長谷川 敏嗣
井上 孝和	大城 和也	田崎 ゆき	垣内 暎恵	松下 郁雄	丸浜 江里子
大村 哲夫	高橋 幸雄	晃由 登本	yano tokio	久保田 貢	Kuwaki Shinobu
Junko Iwasaki	鉄羅 由伽	Aiko Kojima	Satou Masaru	整子 岩村	荻野 佳容
松本 ますみ	野島孝司	長内 敏之	IIDA YOSHIYA	西村 正裕	須山 教行
市原 みちえ	Hara Hidesuke	中村 幸恵	高橋 知文	入江 洋司	森田 彦一
三村 翰弘	降矢 美彌子	吉井 ちづこ	岡村 幸宣	野里 純	TSUNEAKI
千鶴 孝裕	砂川 安弘	竹本 文直	宮本 呂江	小山 志保子	GUNJIMA
川田 豊実	岡田真治	入江 喜久雄	鶴岡 秀幸	torii yasushi	保立 道久
山本 純	押田 健太郎	Lee yuk yee	樋口 和夫	小松 清生	川村 正信
Ishikawa Yasuko	奥 英子	kamatani	土屋 一恵	遠藤 禎子	佐竹 義男
柳瀬 真保	膳橋 忠司	tomoyuki	高田 宮子	今立 悠子	中島 佳子
金城 かおり	伴野 克己	信太 秀紀	鶴ヶ岡 裕一	Arai Tomoyuki	yoshimoto yuki
大塚 要治	藤原 尚久	清水 民男	黒田 貴子	堀江 俊一	八角 泰男
谷森 櫻子	相沢 由美子	今井 淑子	Tada Atsuki	小浜 健児	千葉 誠樹
鬼頭 曉史	矢口 和也	池内 達郎	小倉 志郎	春田 明郎	岩田 郷
Choichiro Yatani	濱崎 耕一	Kouda Reiko	木村 康介	たきぐち まさよ	牧野 美智子
田中 猛之	岡田 良子	斎藤 京子	運枝 中矢	來住 直人	松葉 孝雄
奥出 智行	yamamoto mari	キム木下 弘直	浅川 保	仲吉 司	安部 日出男
Terumi TERAO	kouzou asakura	松本 昌	KIKKAWA	大久保 厚	山下 俊雄
須貝 道雄	吉田 幸正	大野 建	Hikaru	東海林 次男	ちづる むとう
白石 かすみ	野崎 幸枝	中島 さおり	橋本 多織子	大澤 真人	金城 信春
友野雅志	Otsu Tetsuko	酒谷 義郎	関 誠	古田 勇	日土 潤
Yatabe Kohei	志村 秀三	Inoue Etuko	黒田 雅一	千恵子 西尾	菊田 實
坂西 尚樹	吉池 俊子	秋山 高澄	松鶴 光子	志賀 功	田中 貞児
中村 芳江	宮城 勇	行雄 高橋	日達 綾	小菅 則雄	Iizuka Shinzo
松下 徳二	kise keiko	伊藤 英雄	紅美子 梅村	小林 倫子	大平 正則
清水 晴好	土井 由三	塩川 慶子	中谷 臣	中村 和夫	木村 美佐子
山崎 理恵	内藤 剛	砂川 浩慶	福田 和久	Obata Utako	工藤 睦
川村 肇	WATANABE	梅川 幸生	中西 弘行	鈴木 淳	五十嵐 典子
坂田 宏子	Tetsuo	家後 厚子	山本 直美	野馬 丸ノ	ookura
板井 八重子	中村 彰信	深谷 誠一	長谷川 良子	Yuki Miyamoto	masayuki
根木山 幸夫	Yuyama	水島 修	LEE YUK YEE	富田 朝己	西谷 雄史郎
小野 雅章	Tetsumori	林 佐登子	渡邊 圭	丸浜 昭	渡辺 京
沖田 晴美	佐藤 みなみ	十河 一雄	SAITO YOKO	浦島 清一	Nakamura
福島 浩治	Shinomiya Ryoza	長屋 高弘	米山 美保	杉本 泰郎	Takashi
青木 然	富山 裕美	Sahashi Chigiri	武部 健一	大林 正幸	國吉 真由美
Tsunakawa Eiji	岡野 亘	澤山 正義	林 真衣	小熊 忠利	川島 健次
					KUKAWA

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

KAZUYUKI	東 道成	長縄 江津	鈴木 孝雄	大城 祐里乃	草野 厚子
小島 珊瑚	本村 安範	小川 玲子	梅林 真里枝	康輔 竹之内	伊森 公治
鳥山 淳	富田 宏治	五十嵐 照芳	takaesu masaya	adachi yoko	豊岡 幹雄
中西 綾子	三田 政雄	荒木 正子	井田 由美子	和田 哲子	荒井 章
Sato Seishi	村中 常和	浜崎 眞実	Yamaguchi	柴宏 寺島	岡本 公一
中嶋 直子	森木 良昭	麻生 透	Shigeki	佐々木 憲一	Yosiura Junji
北田 依利	TOYOSHIMA	小河 義伸	鳥塚 義和	兼城 賢榮	松村 良一
Tomida Shizuka	HIROTAKA	照屋 匡	八耳 文之	大塚 達	南北 政彦
伊藤 孝	森崎 典子	高嶋 伸欣	八耳 勝美	鈴木 均	かがみ 道子
Iwasa Tetsuo	朝男 小洲	山口 里子	宮嶋 美子	濱田 大輔	嶋袋 豊治
金城 正勝	Yamamoto	高木 智子	Goto Susumu	東 英明	緒方 静男
滝口 正樹	Hiroshi	羽山 圭子	曾原 糸子	齋藤 雅子	山下 京美
浅野 厚子	Mukai Keiko	山口 和子	古澤 めい	村井 章介	上山 博
Hirosi Yasima	星野 政幸	田崎 敏孝	吉水 公一	滝川 恵津子	水島 詩乃
丹羽 蒼一郎	角田 暢夫	宮城 秋乃	小松 克己	谷 卓生	Oyama Tomoko
浜野 和美	河 かおる	川添 智史	山中 吾郎	山口 晶子	東本 久子
kobayashi	井上 輝子	小笠原 晋也	半沢 里史	金子 裕理	山口 真理
michiru	kurasawa	嶋田 聡美	宮崎 章	岡原 美知子	matsumoto mari
中村 理香	takeyoshi	小倉 隼門	本田 由紀	柳沢 民雄	太田 シノブ
清水 英明	土田 謙次	小野 準郎	安井 俊夫	庄司 美菜子	弓矢 健児
Saito Takao	中町 隆宏	いだ いちろう	田代 将輝	宮崎 教子	赤塚 知美
小山 七積	君島 和彦	Ikeda Masumi	俣 義文	坪川 宏子	吉澤 和芳
逸見 研	鶴巻 諒人	黒柳 保則	梅若 志歩	富田 成美	村上 敏明
三野 秀雄	今野 優之	宏道 梅林	山田 耕太	kurita masato	宇根 睦美
山本 寛二	寺尾 眞紀	佐藤 洋史	斎藤 雅史	大柳 武彦	木谷 直香
浅生 卯一	才二 稻葉	内田 正樹	上坂 智恵美	中村 恭子	田沼 滋男
菅 ゆう子	杉谷 みちよ	小平 慎一	佐藤 脩介	落合 正史	urata satosi
武者 龍男	中辻 加奈子	宮城 隆志	三橋 広夫	梅原 利夫	藤原 國雄
黒川 衆平	高木 稔	福島 久幸	永持 千勢	大和 玲子	久保田 真樹
巻 和泉	佐藤 喜正	ubukata suguru	小木曾 友昭	表野 藤作	久保田 真樹
喜多村 憲一	山上 博信	華房 実	樋浦 敬子	池田 ゆかり	八木 和美
Kaya Emiko	長野 協一	山野 晴雄	senjin kato	渡辺 哲生	撫斐 ちひろ
横山 太一郎	高橋 信行	教賀 昭夫	小関 すみれ	大橋 奈穂子	沢田 朝子
大槻 雅勝	塩崎 修	三上 真由美	山崎 健太	三上 映子	加瀬 淑子
tooru itou	takasuka tateo	Akiko Nakagaki	新藤 礼子	Murakami	西村 秀一
下埜 正紀	鈴木 裕司	高梨 晃嘉	大竹 もも	Safoko	清水 浩一
不破 百代	akiko oguchi	高橋 順子	菊地 健太	中村 真知子	山下 直美
川島 進	岩木 俊一	斎藤 遙山	栗又 衛	坂川 和俊	中本 直子
			amano fumiko		

「戦後沖縄・歴史認識アピール」賛同者名簿 (Change.org サイトより, 2016.4.21 現在)

黒田 光枝	山下 明子	青木 京子	大門 理恵	半谷 博明	廣岡 逸樹
杉林 和子	加藤 晶子	山根 巧	大里 知子	大澤 美絵子	関谷 和子
道雄 櫻井	萩野 美穂	北原 行雄	桑山 加志子	小山内 和子	小川 洋
アラキ カズヤ	平井 和子	木下 啓子	伊藤 陽寿	井上 正之	尾木原 唯史
matsushita	上田 律子	Omata Kenichi	山本 たかし	今井 忠	迫 晋作
kiyoko	本田 有美子	よしだ ほるみ	丸谷 地三	井口 博充	田村 真弓
鳥井 康子	増岡 広宣	TOMOE MORI	田崎 純爾	nakajima	佐藤 方信
Seiichi Naka	西岡 由紀夫	福島 博子	大八木 賢治	miyoko	大島 治
SATO HIROSHI	Tsurumaki	渡辺 眞知子	高橋雅幸	onda natsuko	森山 眞理子
大森 正治	Motoko	野村 まり子	外間 永邦	nagmo akira	岡田 信也
広瀬 よしこ	Nakagaki	島山 照子	芳澤 拓也	太田 昭夫	嶋崎英治
松永 謙郎	Shusaku	小笠原 俊文	横井 やすお	八木 八千代	堀 雅晴
山下 悟	梶取 峰晃	小嵐 優	晶子 小林	玉城 豊	谷口 捷生
浅羽 和子	河野 清	相沢 緑	佐野 泰道	養田 礼子	前田 りさ
Manabu	土屋 一子	片岡 万里子	前田 眞敬	泉谷 五十鈴	尾林 隆
Yamamoto	中井裕子	大仲 尊	小堀 俊夫	世界 動物	酒井 雅江
井上 陽子	上坂 胡桃	長谷川和男	植田 耕造	matsui chiaki	林 武文
INOUE Molly	matsuki junkichi	徳森 りま	永岑 三千輝	Uno Hiroko	村田 博
蒔田 直子	神澤 誠	TAKAHASHI	吉崎 健二	久夫 松永	田村 彬
なかやす れいこ	池田 優子	AKIKO	畑中 宏子	菊地 利奈	mina yonaha
渡邊 泰司	西川 祐子	村山 直樹	橋野 高明	武田 和夫	八耳 俊文
松原 裕子	養田 明子	杉山 輝子	Fukuda Natsumi	Okabe Atsuko	廣田 篤憲
Iyanaga Kenichi	山崎 晃裕	土屋 芳治	木平 良史	山下 あつこ	五十嵐 強
杉本 諒	篠原 麻里	佐々木薫	高妻 昭子	伊藤 義幸	(1,955名)
宮川 泰	入山 弘之	yonaha keiko	鶴岡 勲	Umeda Mina	
松本 裕喜	冨田 杏二	岸本 嘉江	正木 韶一	Nakano Midori	
石橋 啓一	松井 奈穂	O.R.	辻 淳子	吉田 伸之	
牧原 憲夫	菅 幹雄	Kotaki Toyomi	寒河江 東一	mana okano	
Kagami	木村 尚子	田中 誠二	戸川 雅子	広岡 淨進	
Masakazu	中谷 文美	井川 雅子	鎌谷 智之	FujinoMasakazu	
門傳 仁	鎌田 壘	山下 曉子	仲野 栄樹	川前 涼子	
三田 清次	市川 貴史	横山 杉子	Sugiura Kooshou	卯月 玲子	
三木 貞夫	渡邊 正子	岡野 治子	片岡 伸行	美 喜代	
Okamura	平良 昌史	石田述子	高島正光	堀端 謙一郎	
Ryouichi	野原 吉常	高木 一彦	Masamitu	渡部敦子	
関山 稔	澤村 陽子	大畑 京子	Takashima	豊島 晃司	
Maki Yoichi	星野 修三	高橋 明子	nakamura	片倉 幸子	
広南 和子	青木 茂	牧 律	yoshiko	入江 仰	